豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

牟呂

豊橋校区史 46

Muro

写真撮影：中日新聞社

牟呂

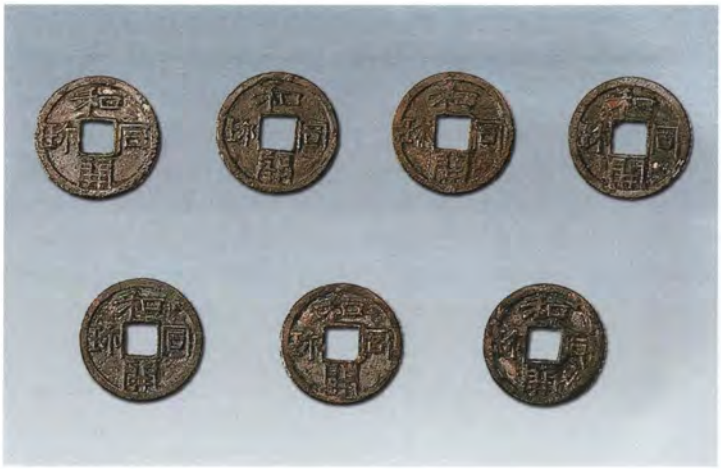
MURO

牟呂の遺産

旧石器時代の石核（若宮神社南貝塚）

イモガイ製腕輪（水神第２貝塚）

平安時代の碗（若宮前畑遺跡）



和同開珎（市道遺跡）

円面硯（若宮前畑遺跡）

三ツ山古墳全景

牟呂校区防災訓練

平成十七年

牟呂八幡宮祭礼

平成十八年

とよはし100祭記念

牟呂校区大運動会

平成十八年九月十日

通学団リレー

玉入れ

ムカデ競争

牟呂中学校吹奏楽演奏

綱引き

100祭牟呂花火

総踊り ええじゃないか

手筒花火

とよはし100祭
マスコットトヨッキー

発刊によせて

平成18年度
豊橋総代会長
西　義雄

このたび、各校区のご努力により、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を刊行する運びとなり、関係者のひとりとして、心より嬉しく、また喜ばしく思っております。

この事業は、豊橋市制施行100周年記念事業の一環として、校区の歴史や文化、生活のようすなどをまとめたものであり、市内にある51校区すべてが揃って発刊できたことに大きな意義を感じます。各校区におきましては、校区で募った編集委員さんたちを中心に、資料の収集から原稿の執筆、校正作業など、多くの地域住民の方々が携わられたことと思います。今回の取り組みを通し、地域のつながりが広がり、また人々のふれあいが深まり、まさしく、とよはし100祭の基本理念である“新たな市民像を求めて～パートナーシップによる協働”を実践したものになりました。そして、これを契機に、各地域で新たな取り組みが始まることが、とよはし100祭を一過性のものに終わらせることなく、次の100年に向けた“市民主体のまちづくり活動”につながるのではないかと思っております。

最後に、本冊子の発刊に際し、ご尽力、ご協力いただいた多くの市民の方々に改めてお礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

平成18年度
牟呂校区総代会長
山田利昌

平成16年度の豊橋市総代会において、市制100周年を記念した校区史を作成することが決定されました。これを受けて、当校区はその年度に執筆者を選び、17年度の総代会と執筆者の皆さんとで編さんをはじめました。

牟呂にはすでに平成８年11月に刊行された『牟呂史』があります。信頼できる郷土誌を目標に作成された素晴らしい内容で、570頁にも及びます。

今回、豊橋市総代会から指定されたのは50頁です。当初は『牟呂史』のダイジェスト版をと簡単に考えていました。

しかし、実際に取り掛かってみると、単に『牟呂史』をまとめても要約しきれないという執筆委員の結論となりました。

そこで『牟呂史』を参考にし、区画整理事業完了後における校区や町内の移り変わりに焦点を当てて作成し、一人でも多くの皆様に読んでいただき、後世に伝えることのできる本にすることをねらいに執筆することとなりました。

原稿作成にあたっては校区の皆様方にお話を伺ったり、資料を提供していただいたりと無理難題にも関わらず、大変温かいご支援ご協力をいただき心から感謝申し上げます。

目　次　CONTENTS

第1章　自然と環境

1　校区の位置 …… 7
2　土地のようす …… 7
3　気候のようす …… 8
4　災害のあらまし …… 9
（1）三河地震 …… 9
（2）十三号台風 …… 9
（3）伊勢湾台風 …… 10

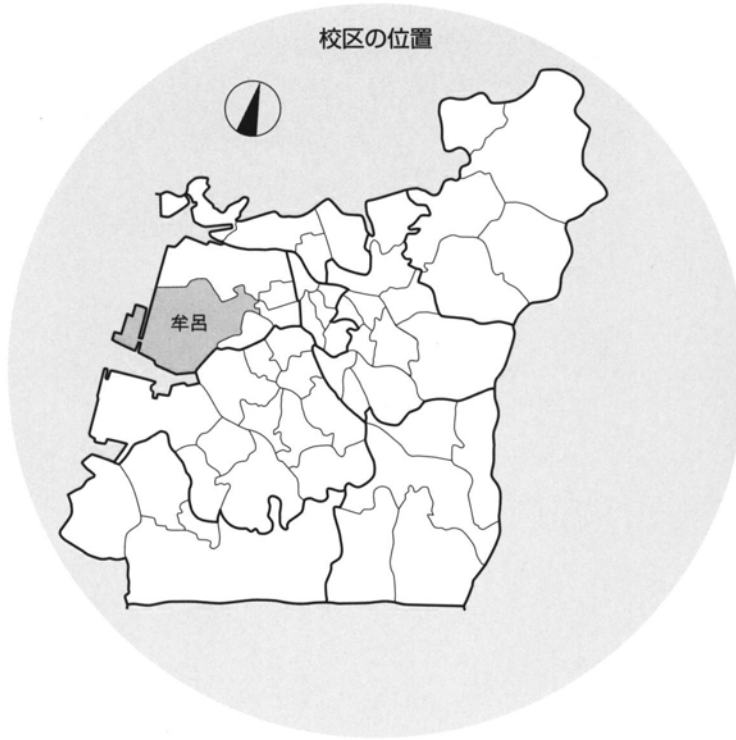
第2章　歴史と生活

1　歴　史 …… 11
（1）原始時代 …… 11
旧石器時代 …… 11
縄文時代 …… 11
弥生時代 …… 12
古墳時代 …… 13
（2）奈良・平安時代 …… 13
（3）鎌倉・室町時代 …… 14
（4）江戸時代 …… 15
（5）明治・大正・昭和（戦前） …… 18
（6）昭和（戦後） …… 20
（7）区画整理以後の変遷 …… 20
2　産　業 …… 25
（1）牟呂の農業の移り変わり …… 25
（2）海と牟呂の人びと …… 27
（3）牟呂の商業と事業所 …… 29
3　生　活 …… 31
（1）体育活動 …… 31
（2）市民館活動 …… 32
（3）牟呂用水美化運動 …… 33
（4）自警団と消防団 …… 34
（5）老人クラブ、成人式 …… 35
（6）町内会活動 …… 36
坂　津 …… 37
外　神 …… 38
公　文 …… 39
大　西 …… 40
中　村 …… 41
市　場 …… 42
三　郷 …… 43

第3章　教育と文化

1　学校教育と保育 …… 44
（1）保育園・幼稚園 …… 44
明照保育園 …… 44
三郷保育園 …… 45
豊橋若葉幼稚園 …… 45
（2）牟呂小学校 …… 46
（3）牟呂中学校 …… 47
2　史跡と民話・昔話 …… 48
（1）牟呂城（鵜殿兵庫之城）址 …… 48
（2）民話・昔話 …… 48
（3）牟呂音頭 …… 49
3　信仰と風俗 …… 50
（1）牟呂の神社 …… 50
（2）牟呂八幡宮の祭礼「神事相撲」 …… 50
（3）水神社信仰と祭礼 …… 51
（4）庚申信仰 …… 51

編集後記 …… 52

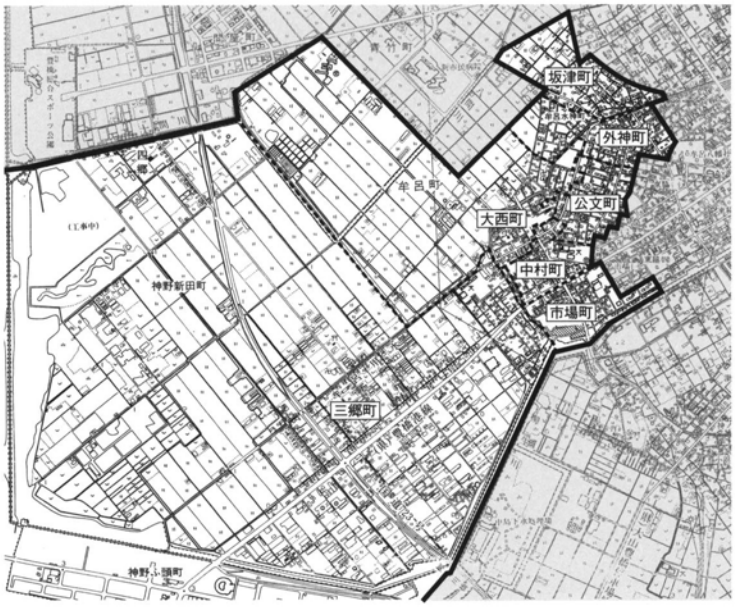


中扉の絵「市場港」伊藤英利・画

第1章　自然と環境

1　校区の位置

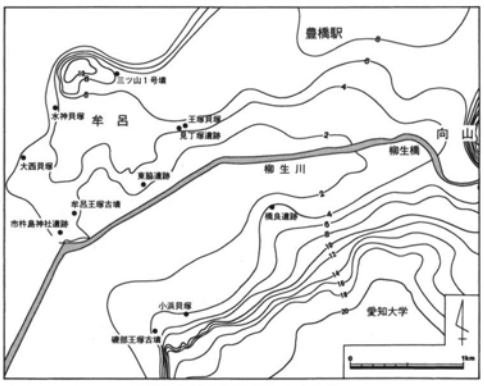
牟呂校区は、豊川と柳生川に挟まれて渥美湾に突き出た台地の先端部と神野新田などの干拓地からなっている。豊橋市の西部にあたり、北に吉田方校区、東に花田校区・羽根井校区・汐田校区、南に磯辺校区・大崎校区があり、校区の西端は渥美湾によって区画されている。校区は東西約４㎞、南北約３㎞の範囲にあり、町内会としては坂津、外神、公文、大西、中村、市場、三郷の７町で組織されている。牟呂小学校の体育館の位置は、東経137度21分、北緯34度44分にあたる。



牟呂校区各町内会の位置と範囲

2　土地のようす

牟呂の地形は台地と低地に分かれる。台地は、豊川により形成された河岸段丘で、「豊橋下位面」と呼ばれる。坂津町の境松周辺は標高10.6ｍで周囲より一段高く、それより大西や市場にかけて標高は２～３ｍと漸次低くなっている。



牟呂地区周辺の標高

低地は、台地の裾に広がる沖積低地と埋め立てや干拓によってできた標高が２ｍ以下の低い土地である。

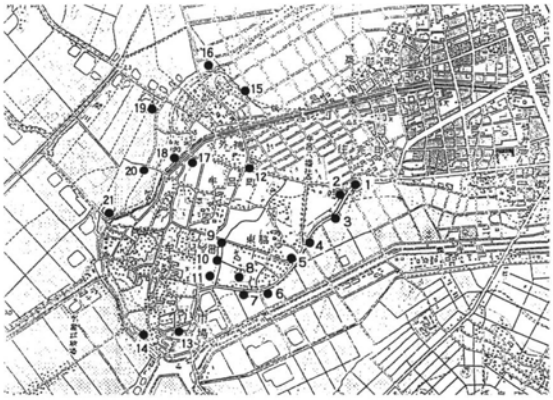
区画整理前には、台地と低地の境は８ｍから２ｍの比高差をもつ段丘崖になっていた。そこには、マダケやヤブツバキ・タブノキが生え、竹林や雑木林となっていた。

区画整理によって高い台地を削り低地を埋め立て宅地化したため、比高差は少なくなった。

牟呂台地の段丘崖と竹林（坂津町 平成17年３月）

同じように、低地においても水田や養魚池を埋め立て宅地化したため台地と低地との境は一層分からなくなっている。

かつて、牟呂台地の裾からは良質な水の湧き出るところがあり、『水神古窯灰原』という遺跡の発掘調査報告書によれば、21か所以上の湧水地が記されている。そこは、人との関わりが深く飲料水や水田を潤す湧き水として使われてきた。昭和32年（1957）頃まで、牟



湧水地点の分布図（『水神古窯灰原』より転載）

呂町水神には水神様（分布図19）が祀られていたが、現在は牟呂八幡宮に合祀されている。また、見丁塚には「仲六酒造」（分布図2）という酒造工場があった。酒造りに必要な良質の水を得られる水脈の存在を伺わせる証しである。そんな水脈や湧き水も区画整理後は、分からなくなっている。

3　気候のようす

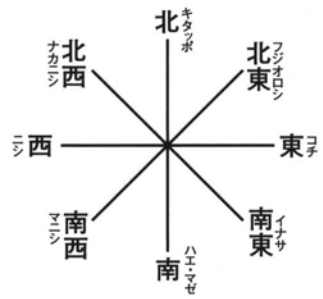
豊橋の気象観測データは、中消防署通信指令課に設置されている気象情報収集装置で収集されている。

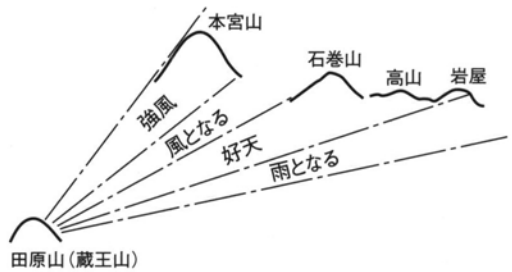
毎年のデータを比較すると大きな違いはないので平成15年度のデータを掲載する。主たる風向は西北西、平均風速は3.3m／s、平均湿度は72.2%、平均気温は16.1℃である。

牟呂校区は、昔から海との関わりの深い生活をしていたことや漁業従事者が多かったことにより会話のなかに気象との関わりの深いものが多い。

○人に会ったときのあいさつ
・今日は、いい日だのん。
　そうだのん。いいあんばいだのん。
・少しお湿りがほしいのん。
　そうだのん。
・うっとうしいのん。
　そうだのん、うっとうしい日が続くのん。

○六条潟でノリ採り作業中の会話
夕方、田原山（蔵王山）からいずれかのフジ（雲の流れの形）が出れば、翌日は会話のような天気となる。





・(田原山より本宮山の方向へ雲が流れる時)
　明日は風が出そうだのん。
　ほんとうだ、明日は海はお休みだのん。
・(田原山より岩屋の方向に雲が流れる時)
　明日はあんばいが悪いのん。
　そうだのん。雨だのん。
・(田原山より石巻山の北側の方向に雲が流れる時)
　明日はいい日になるかのん。
　そうだ、やっとかめで、凪いだ良い日和りだのん。

気象と関連する会話（杉浦久雄氏教示）

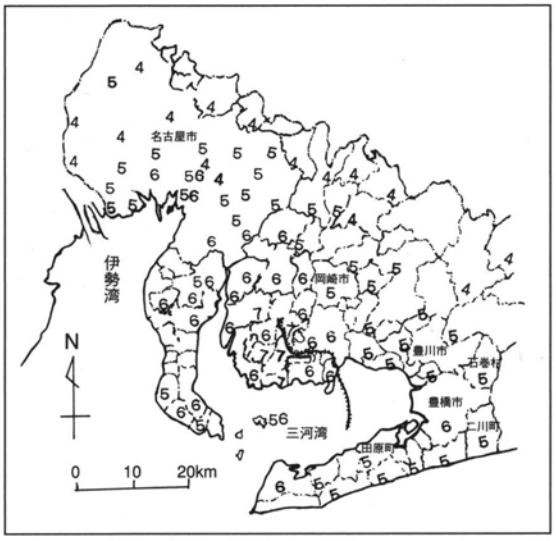
4　災害のあらまし

今までに愛知県や牟呂校区が受けた大きな災害には、地震や台風がある。そのうち大きな被害を及ぼしたのは三河地震と十三号台風、伊勢湾台風である。

(1) 三河地震

三河地震は、昭和20年（1945）１月13日午前３時38分頃に三河地方を襲ったマグニチュード7.1の大地震である。この地震は、昭和19年（1944）12月７日午後１時36分頃に発生した東南海地震の約37日後に起こった地震である。当時は戦時下にあり、その地震についての詳しい資料は公表されておらず、また、乏しい資料しか残っていない。

本震と考えられる以前に中央気象台により観測された揺れは、１月11日と12日の２日間



『三河地震の震害と震度分布』より

で14回あった。そのうち１月11日午前10時43分に発生した地震は、マグニチュード5.2という大きな揺れを伴った地震であった。

本震は、蒲郡市西浦町沖合の渥美湾（北緯34.7度、東経137.2度）を震央とするものであった。この地震による死者は2,306名、負傷者は3,866名、住宅全壊は7,221戸、住宅半壊は16,555戸であった。さらに地震による著しい地変がみられた。土地の隆起や沈降とともに地震断層ができた。地震断層は、愛知県額田郡幸田村深溝を中軸としたもので深溝断層（別称形原断層・横須賀断層）と名付けられている。

三河地震には多くの余震が伴った。余震回数は１月13日の281回（有感・無感を含む）を頂点として漸次減少したとはいえ１か月の総数は914回（有感196回、無感718回）を数えている。

> 牟呂のあたりでも余震がひどく、屋外に藁だこで仮小屋を作り、藁や筵を敷いてその上に布団を並べて寝たもんだ。
>
> 真冬の１月のことであり、そのうえ戦時中のことだったので苦労が多かった。
>
> （古老よりの聞き取り）

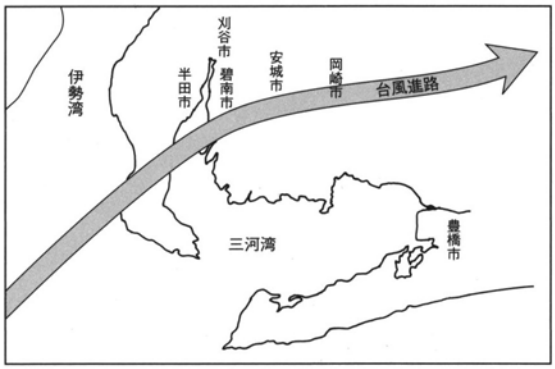
牟呂校区の実質的な被害状況は資料として残っていないので分からない。

昭和21年（1946）12月21日には、南海地震が起きている。

(2) 十三号台風（台風13号）

前述した３つの地震により愛知県や神野新田の堤防は、30～60㎝の地盤沈下や亀裂が起き、堅牢であった海岸堤防も構築当時と比べ弱体化していた。

昭和28年（1953）９月、南太平洋で発生した台風13号は沖縄沖で方向を北東に転じ、同



台風の進路

月25日に紀伊半島に上陸した。

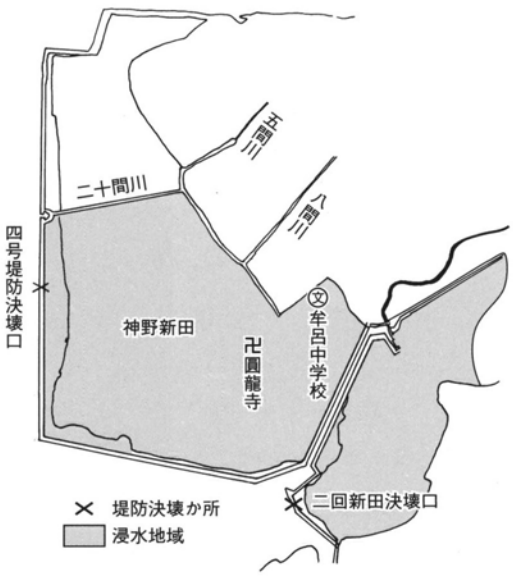
愛知県では、それまでに24日ほど雨が降り続いていたので、地面はたっぷり水を吸い込んでいた。

台風は、伊勢湾を通過し渥美湾にさしかかった。おりしも大潮の満潮時と重なったため、海水は渥美湾一帯の海岸堤防を乗り越え、各所で堤防を破壊した。

伊良湖測候所の記録では、最低気圧957.1ミリバール、総雨量は143.8mm、瞬間最大風速は39.9m/sであった。

台風による愛知県下の被害は、死者71名、行方不明者は24名、負傷者1,731名、海岸堤防の決壊か所は680か所に及んだ。

（「台風十三号始末記」より）



決壊か所と浸水地域

神野新田地区や二回新田地区でも海岸堤防が決壊し、海水の流入するところとなった。新田には海水が流入し、一時は小舟で荷物を運搬することになった。海岸堤防の決壊にもかかわらず、神野新田においては、死者、行方不明者、負傷者は一人もいなかった。

海水が流入していた四号堤防の決壊か所の

牟呂中学校庭浸水状況（昭和28年9月26日）

修復工事は、石俵を投下して行った。深くえぐれた澪（みお）を塞ぎ止める工事は、10月７日から10月26日までの20日間の日数を要した。この時の澪止め工事や修復工事に使用した石俵は105,808俵を数えた。

10月27日からは、新田内部の海水を排除する作業にかかり同月30日にはほぼ完了した。

堤防の修復工事完了後、愛知県は引き続き海岸災害防止事業として、護岸工事に着手した。県下の海岸堤防680か所の９割ほどの護岸工事が完了した昭和34年（1959）９月26日伊勢湾台風が愛知県下を襲った。

（3）伊勢湾台風（台風15号）

昭和34年９月26日午後６時18分潮岬付近に上陸した伊勢湾台風は、時速70km、潮岬測候所929.7ミリバールを記録した。午後９時25分名古屋通過時の中心気圧958ミリバール、平均最大風速37m/s、瞬間最大風速45.77m/sを記録した。

室戸・枕崎台風につぐ史上三番目の大型台風で、愛知・岐阜・三重の三県下で死者4,268名、行方不明者450名、負傷者35,991名、家屋全壊34,021戸、中壊130,698戸、堤防決壊1,979か所、被災者世帯数276,964世帯であった。

神野新田と二回新田の堤防が大きな被害に見舞われることなく終わることができたのは、強固な護岸堤防の建設のお陰である。

しかし、牟呂出身で鍋田干拓地などへ移住された方の中には、犠牲者が何人もあった。

第2章　歴史と生活

1　歴史

牟呂は大きな貝塚があることで昔からよく知られている。今から80有余年前の大正12年(1923)に発行された『渥美郡史』に「此の牟呂の高台を取囲んで馬蹄形に東は坂津から西南の市場に至るまでの一帯、長さ十町（1,090m）にも及ぶ一大貝塚がある。是れが牟呂貝塚である。」と書かれている。さらに昭和8年(1933)発行の白井梅里著『牟呂吉田村誌』や昭和10年(1935)発行の豊田珍彦著『東三河道中記』にも貝塚についての記述が見られる。

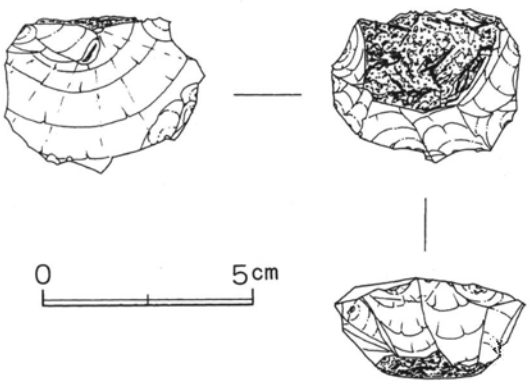
この貝塚の距離を地図上で測定すると約1.8kmになる。殻山の幅は20～30m、厚さ5～7mほどあったようで、我が国屈指の大貝塚といっても過言ではない。貝塚は自然堆積ではなく、人が採集し、食用や手を加えた後に捨てた貝殻が積もったものである。その貝塚を調査することで、当時の人々の生活のようすを知ることができる。

(1) 原始時代

旧石器時代　今から1万2千年以前をさし、土器をもたない時代である。

牟呂地区では、昭和60年(1985)の若宮神社南貝塚の発掘調査で石器が発掘された。この石器はマッチ箱大の大きさで、側面に小さなかけらを剥ぎ取ったあとが7か所あった。

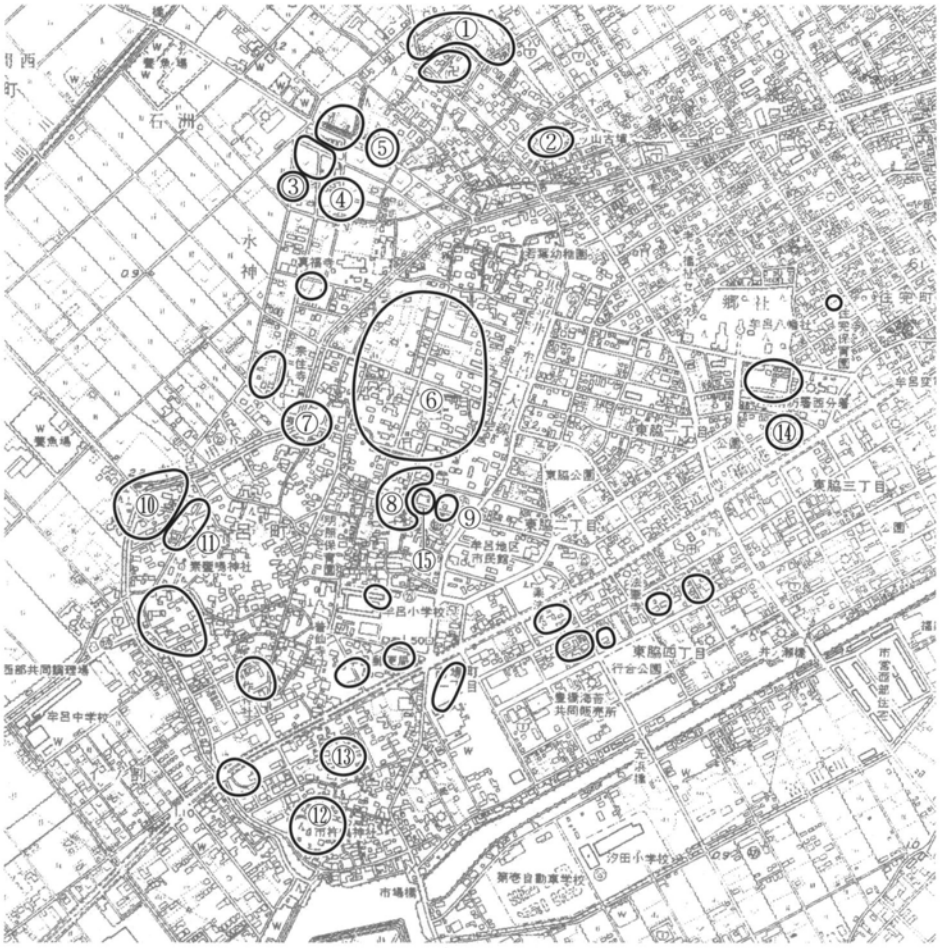
その小さなかけらが製品(細石器)で、石器はその母材である。鑑定によると今から1万5千年から2万年前のものである。その後、遺跡の周辺は調査されたが、この時代の遺構も遺物も発見されていない。たった1点の石器であるがこの時代に人が住んでいたことの証しとして大変価値のあるものである。



若宮神社南貝塚出土の旧石器

縄文時代　今から1万2千年前から約2千3百年前までの約1万年間をさす。

牟呂台地では、14か所の遺跡が発見されている。平成10年度、三ツ山古墳（1号墳）を調査した時、周溝から草創期の有舌尖頭器が1点出土している。坂津寺貝塚は、昭和48年(1973)の夏と冬に試掘調査が行なわれた。貝塚からは土器や石器・骨角器が発見されているが、住居址は発見されていない。大西貝塚は、平成8年(1996)までに都合3回の発掘調査が行なわれた。その結果、貝塚は標高3mの台地から標高1～2mの旧海浜部の砂浜にかけて形成されていた。長さは約235m、幅約105m、面積約19,700㎡となる大貝塚である。さらに貝層の厚さは最大約3mあり貝の総量も膨大である。 坂津寺貝塚は牟呂ではもっとも古い縄文中期にできた貝塚だが、大



旧石器時代から室町時代までの牟呂の遺跡分布図

西貝塚は縄文晩期から形成された貝塚である。今までの調査では住居址は発見されていない。しかし、貝塚から多数の火を焚いた跡、円い石を楕円形に敷き詰めた敷石遺構、貝殻の入ったままの土器、火を焚いた跡に10㎝程の凹みが残っていることなどから、この場所で土器を据えて貝などを煮たものと考えられる。それらの貝で貝塚が形成されたことになる。

貝塚の貝の種類は大きさの違いこそあれハマグリがほとんどである。大きな貝塚があるのにその当時の人々の住居址が見つかっていないことからその理由が検討されている。

弥生時代　今から2,300年前から約1,700年前の600年間をさす。牟呂地区内には、19か所の遺跡が確認されている。

平成５年(1993)には、大海津三昧所の発掘調査が行なわれた。この遺跡は大海津三昧貝塚（水神第２貝塚）と呼ばれ、ハマグリを主体とした貝塚である。貝塚の範囲は長さ44ｍ、幅19ｍで貝層の厚さは最大で1.32ｍである。この貝塚では、火を焚いた跡が392か所、敷石炉が３か所見つかっている。縄文晩期から弥生時代にかけて形成されているが、大西貝塚と同じく浜辺で火を焚き、土器で貝を茹で、干し貝として保存食にした可能性が高い。出土したものの中にイモガイ製の腕輪が５個体分出土している。イモガイは、南海の温かい海に生息する大型の巻貝である。大型の巻貝が腕輪に加工され牟呂まで運ばれてきた。南方との交流が考えられる。

若宮前畑遺跡では、銅鏃が１個採集されて

いる。現存する長さは1.3㎝、幅は1.4㎝、厚さは0.4㎝である。銅鏃は豊かな富をもつ首長層が入手した宝器のひとつである。見丁塚F遺跡からは、方形周溝墓が1基発見されている。

縄文・弥生時代の遺跡は牟呂台地の端にあり湧水地との関係が強い（8頁の湧水地点分布図参照）。貝塚や遺跡の調査の結果、確かに住居址は少ない。そのため他地区から牟呂台地にやってきて干し貝を生産していたという説も生まれてくる。

しかしながら、結論は今後の調査に待ちたい。

古墳時代　古墳はおもに豪族の墓と考えられ、3世紀後半から7世紀前半の約400年間とされている。大陸からの渡来人により建築、土木、窯業関係などの進んだ技術や文字、仏教等の文化が伝えられた。

牟呂台地には12基の古墳がある。このうち三ツ山古墳は坂津にあり、埴輪をもち、古墳の周りに周溝を巡らした5世紀後半に造られた前方後円墳である。全長は約33m、後円部径約16m、高さ約3mである。周辺には6基の円墳が存在していたようである。しかし現在では6基とも消滅している。

牟呂王塚古墳は明治時代までに3度も発掘され、横穴式石室を有する円墳（前方後円墳説もある）である。副葬品として圭頭大刀や馬具類、玉類などの装身具が出土し、現在、東京国立博物館に所蔵されている。

その他に市杵島神社古墳、東脇古墳、権現神社古墳、郷社東古墳がある。

発掘調査により、この時代の住居址が5つの遺跡（大西遺跡、大海津貝塚、公文遺跡、見丁塚F遺跡、見丁塚G遺跡）で見つかった。合計すると弥生時代からの縦穴住居址と平地住居址で50軒になる。

その他、三河で最古の須恵器を焼成した水神古窯も水神地区で発見されている。

(2) 奈良・平安時代

大化元年(645)の大化の改新後、世の中は次第に天皇中心の中央集権国家にまとまるとともに、古代律令制度が整ってきた。政治の改革が行なわれたことにより、中央では文化だけでなく経済も交通も著しく発達し、街道も整備されてきた。しかし、古代の交通は、多くの困難をともなっていた。特に橋のない大河の渡河は難所となっていた。

『太政官符』には、承和2年(835)「参河国飽海矢作両河各四艘　元各二艘。今各二艘加。」とある。飽海河（現豊川）は川幅が広く、交通の難所として知られていたし和歌にも詠まれていた。この時の渡し場が『志香須賀の渡し』である。この渡し場跡が、坂津寺の北西側の台地の裾にあったとされているが、定かでない。

牟呂台地では、現在までにこの時代の遺跡が14か所見つかっている。

若宮前畑遺跡は、昭和51年(1976)に発掘調査されている。住居址と円面硯や墨書土器、

若宮前畑遺跡のようす

平安時代の碗や皿が出土している。硯は平安時代のものである。建物跡や出土した土器からこの地は、『志香須賀の渡し』の役所跡の可能性もあると指摘する学者もいる。

市道遺跡は、昭和58年(1983)から平成8年(1996)まで発掘調査が行われた。遺跡は大きく北側の建物群と南側の柱穴列に囲まれた大

型の建物群に分けられる。北側の建物群は奈良時代から平安時代にかけての建物が約90軒発見されている。南側の建物群は、東西100ｍ、南北99ｍの柵か塀に囲まれており南門跡、金堂跡、講堂跡、僧坊跡などの建物址が発見されている。金堂跡の周りからは布目瓦が出土している。金堂は瓦葺きの屋根であったことが伺える。さらに、補修用の瓦を焼いたと考えられるロストル式の平窯も発見されている。これらの遺構址を総合すると、ここには、奈良時代から平安時代にかけて、寺院を伴う豪族の館かこの地方を治める役所（郡衙址）があって栄えたのではないかと言われている。

（3）鎌倉・室町時代

鎌倉時代は北条氏の得宗領となり、室町時代には結城領となったようである。

得宗は、鎌倉幕府の執権である北条氏のなかでも、その宗家の当主をいい、北条義時の法号である「得宗」から始まった名称で、北条氏嫡流の領地を「得宗領」とよんでいる。得宗領は全国に300か所ほど知られている。いずれも生産、交通などで地域の拠点とされた所であることから牟呂郷は有力な郷（村）であったと思われる。ところが、建武の中興のとき後醍醐天皇の側近の武士となった結城宗広に与えられている。しかし、嘉吉元年（1441）の結城合戦で結城の本城が落ち結城氏朝が戦死してからはだれの支配下になったか不明である。

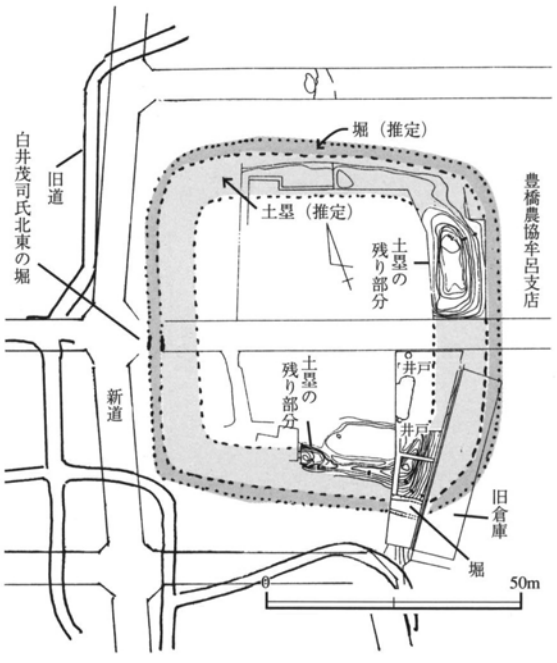
昭和60年度（1985）熊太郎神社遺跡の発掘調査では幅が約４ｍ、深さが現地表面から約1.9ｍで、断面がＶ字状をなしている大溝が発見された。この大溝は一部が発掘されたのみであるが、南北50ｍ、東西38ｍあった。これをもとに推定すると、東西、南北50ｍ以上の長さの溝で、豪族の屋敷の周囲を巡る堀と考えられる。また、この遺跡の周囲から建物跡が発見されている。建物跡は掘立柱を立てたもので間口が３間から５間、奥行が１間から２間の広さである。６畳一間ぐらいの寝起きする所と作業場や炊事場をもった程度の家である。

ここから、フイゴの羽口や鉄の滓が見つかっている。鍛冶関係の仕事が行なわれ、農具や鉄器を生産していたことが伺われる。

さらに塩を生産していたようで製塩土器も見つかっている。漁をする時、網につけた錘も見つかっている。この時代の庶民の生活のようすが想像できる。

豊橋農協牟呂支店の西にある小丘に「鵜殿兵庫之城址」の石標が建っている。これは、「牟呂城址」とか「牟呂村古屋舗」とも記されているものと同じである。昭和61年（1986）の調査によって周囲を高さ２～３ｍの土塁が巡り、その外側に幅が３～４ｍ、深さ1.3ｍ、長さ67ｍの方形の堀が見つかった。

この城跡も戦国時代の牟呂近辺を治めていた豪族の館であると考えられている。



牟呂城推定図（『牟呂史』より）

(4) 江戸時代

牟呂村　慶長5年(1600)関ヶ原合戦に勝利した徳川家康は、同8年、征夷大将軍となり江戸に幕府を開いた。これ以降明治時代になるまでの約260年間が江戸時代で、牟呂校区は汐田校区と併せて牟呂村と呼ばれ、譜代大名である吉田藩の治める領地であった。

年貢などを納める基準となる村高は、江戸時代初期の元禄年間(1688～1704)には1,686石余、後期の天保年間(1830～44)には2,231石余であった。享保10年(1725)の近隣村々の石高は下表のとおりで牟呂村の大きさが分かる。

村名	石高	村名	石高	村名	石高
羽田	982石	吉川	297石	小浜	529石
野田	689石	馬見塚	451石	草間	1,264石
三ツ相	216石	牟呂	1,710石	橋良	757石

牟呂の三組　石高が多いことは田畑の面積が広いことと大体一致する。当然人口も多いことになる。幕末、安政5年(1858)の「吉田領戸数調」では家数508軒、人別2,420人（男1,206人、女1,214人）となっている。村が大きければ、村内の取りまとめにも、年貢の割り当て納入にも何かと支障が多かった。近くの吉田方村は同じような理由で、寛文11年(1671)藩に申し出て羽田・野田・吉川・三ツ相・馬見塚の5か村となり、別々の年貢免状となっている。江戸時代には牟呂も上・中・下の3組に分かれ、一般には上牟呂村・中牟呂村・下牟呂村と呼ばれていた。

上牟呂	市場・大西・大森・大海津
中牟呂	坂津・外神・大公文・小公文
下牟呂	東脇・行合・供長・林・中村

これらの組は江戸時代初期にはすでに存在していたようである。明和2年(1765)に吉田藩へ願い出、年貢免状（年貢の納付通知書）を上・中・下の3通に分割してもらった。この3組にはそれぞれ庄屋・組頭・百姓代といった村役人が置かれ、一つの村と同じように機能していたが、3組の土地は入り組んでいたので、その境は明確でなかった。

農民の負担　江戸時代は米の経済といわれているように、税の大部分は田畑にかかる年貢米であった。米を生産しない畑や屋敷も米に換算した。毎年村ごとに年貢を納めるべき石高等を記した年貢免状が藩より出され、村でそれを各個人に割り当て納めた。年貢免状が3組に分割される前の享保7年(1722)の年貢免状でその様子を見ると以下のようである。

村高	1,710石1斗5升3合
年貢米 海方運上 茶年貢	422石4斗4升 23石 3升7合
計	445石4斗7升7合 （3斗5升入り俵　1,272俵余）
椿年貢 夫金 鴨運上 塩年貢	金　1分　銭1貫36文 金2両　銭　189文 銭4貫300文 金7両1分　銭　426文
計	金9両2分　銭5貫955文

田畑などにかかる年貢米として422石余、他に海からの収穫物に関する年貢として23石、お茶への年貢が3升7合で、合計して米で445石余、俵にして1,272俵余を納めた。さらに椿や鴨、塩等にかかる年貢をお金で9両2分余納めている。

牟呂村宛年貢免状　享保7年(1722)

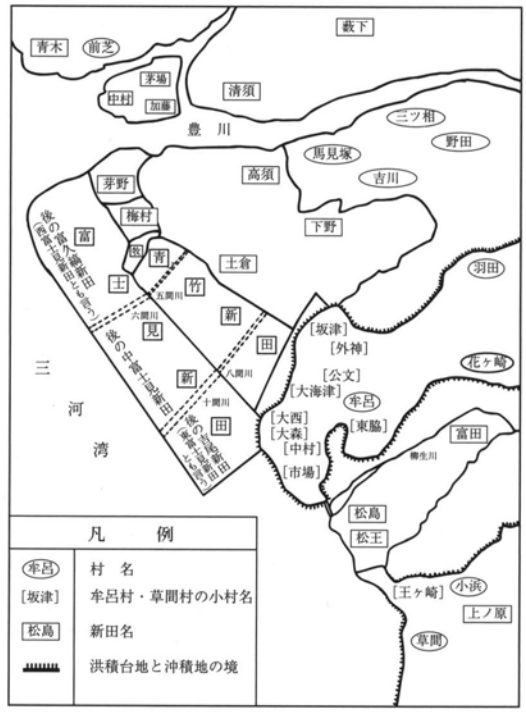
その他の負担　年貢の外にも幕府や藩主へお金や人（労働力）で各種の負担があった。

幕府が河川の改修、社寺の造営をしたり、朝鮮通信使など特別な通行のある時には国役金が課せられ、村高につき幾らと割り当てられた。享保６年(1721)の朝鮮通信使来朝の節には金10両２分余が割り当てられた。この他領主への負担として、江戸屋敷が類焼した際の分担金、江戸屋敷で働く中間の選出、山役・土役といった領内での土木工事へ人足を出すことなどがあった。

また、東海道の交通に関する負担として助郷役・助船役・掃除丁場役があった。助郷役は宿場で用意する人馬が不足した場合に、近隣の村が不足する人馬を提供する役で、牟呂村は享保10年(1725)までは吉田宿の大助郷に指定されており、大規模な通行により人馬が不足する場合にのみ吉田宿へ人馬を出していた。しかし同年以降は二川宿の助郷となり明治に助郷制度が廃止されるまでその役を勤め、二川宿で人馬が不足する場合には昼夜を問わず人馬を提供しなければならなかった。

助船役は吉田大橋が掛け替えなどで通行できなくなった時、船町の運営する渡船が不足する場合に応援の船を出す役であった。また往還掃除丁場役は東海道を重要な旅行者が通行する際に道路の清掃・整地などを行う役で、道普請・松並木の保護・植え継ぎなども行った。牟呂村の掃除丁場は宝飯郡小坂井村の東海道で長さは約190ｍあった。

牟呂村と新田開発　江戸時代初期の牟呂村は西には三河湾が迫り、南と北は柳生川、豊川の両河口に挟まれており、三河湾に突きだした半島状の地形となっていた。この両河川の堆積作用により河口付近には広大な干潟が形成され、新田開発の適地となっていた。江戸時代初期から多くの新田が開発され、牟呂村の人々も新田の開発を行ったり、労働者として新田開発の普請に従事する者、あるいは小作人として田畑を耕作する者など、牟呂村の多くの人が周辺新田と関わりを持っていた。



牟呂村周辺の新田開発

豊川左岸に開発された新田のうち、元禄11年(1698)開発の牧新田は石高は54石余と小さいものの、開発者は牟呂村の牧野六郎右衛門一族とされる。また、明和７年(1770)開発の青竹新田（石高248石余）は江戸時代後期には８割以上の耕作地を牟呂村の人々が小作人として耕作している。

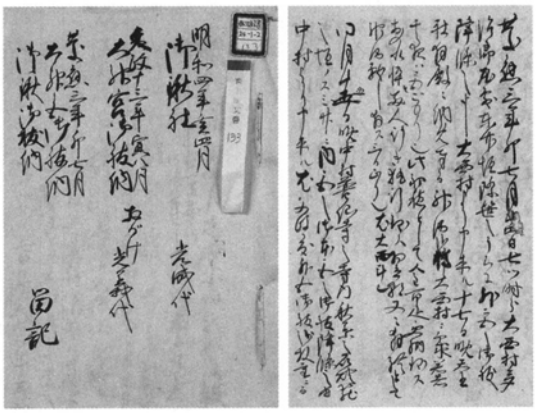
柳生川周辺の新田では寛文７年(1667)開発の松島新田に牟呂村の人々が多く移り住み、耕作していた。また、柳生川南台地上の上ノ原新田は開発年次は不明であるが、牟呂村の人々が開発した新田で牟呂村の人々が多く耕作していた。

六条潟とのかかわり　牟呂村の前面（西方）に広がる三河湾は六条潟と呼ばれ、アサリ、ハマグリなどの食用貝類のほか、藻草、ニラ、ヨラメ（キサゴ）など田畑の肥料となる海草や貝などが採れる漁場であった。年貢免状で

見たように牟呂村は23石の海方運上を納めていたが、これは近隣の10か村の分を併せたもので、この内牟呂村で17石余を負担していた。このため牟呂村の漁場に対する発言権は強く魚介類や海藻の採取日は牟呂村で決めて周辺の村々へ通知していた。こうした海への強い関心から周辺の村々と漁場利用に関する紛争も数多く発生している。延宝8年(1680)には草間村と藻草採取をめぐり、文化元年(1804)には前芝村と立干網をめぐり、天保11年(1840)には草間村とヨラメ貝採取をめぐり、幕末安政年間には吉田宿魚町と吉田宿内での魚の売り歩きについてなど、吉田だけで決着の付くものから、遠く江戸屋敷まで出訴するような大がかりなものまで海の権利を守るための争いを繰り返している。

慶応三年の御札降り(ええじゃないかの発端)

慶応3年(1867)7月14日、牟呂村大西(牟呂大西町)に伊勢外宮のお札が降り、さらに15日は伊雑宮や内宮のお札が降った。村人たちはこれは神が祭りをさせようとしているに違いないと考え、牟呂八幡宮神主森田光尋と牟呂三組の庄屋たちは、お鍬祭の例にならって二夜三日の遊び日(祭礼)とすることにした。こうして18日午後から各村それぞれ手拭い・三尺帯など揃いの衣装で「三百年は大豊年」の古歌をうたい、八幡宮への道々餅や饅頭を投げ、手踊りをした。八幡宮では神事が行われ酒が振る舞われ、大群衆の声はお宮の森にこだました。この後周辺の羽田村・草間村・橋良村・吉田宿などでも次々と御札が降り、祭礼が行われた。吉田宿での騒動は東海道を通じて東西へと伝わり、西へは8月末に名古屋、9月に大坂(阪)、10月に京都、さらに近畿一円に広がりを見せ、11月から翌年にかけて中国・四国地方へも伝播していった。11月には江戸でもお札降りがあった。この一連の騒動は「ええじゃないか」と呼ばれ、ペリー来航以来の幕末の政治的・経済的混乱が続くなか、人々による世直しを希求する意識が生まれていたことが騒動発生の一因とされる。牟呂村でのお札降りは「ええじゃないか」騒動の発端であり、牟呂村の御札降りの経過を詳細に書き残した「留記」(牟呂八幡宮神主森田光尋筆)は豊橋市有形文化財に指定されている。



ええじゃないかの発端を記録する「留 記」

牟呂村の文化

和　算　下牟呂村の庄屋を務めた牧野伝蔵は、吉田船町の斉藤一握の門人として和算を学び、関流和算の免許を受けた。門人は120人以上に及び嘉永7年(1854)には普仙寺(中村)に寿碑(記念碑)が建てられた。

俳　諧　江戸時代後期吉田宿を中心に活躍した俳諧師古市木朶は「月次撰句集」という門人の句を掲載した句集を刊行している。この中には、牟呂村の人々の句も多数掲載されており、牟呂においても当時俳諧が盛んに行われていたことが分かる。

筍やにょきにょきと出る新屋敷　雨足
引き汐や海苔さまざまのさゞれ石　雨速
朝涼し小田町の魚の声　雨舟

寺子屋　江戸時代庶民の間に学問を身につけようとする気運が高まり寺子屋が開かれた。牟呂村では普仙寺(中村)、宗住寺(大西)、楽法寺(東脇)、真福寺(外神)や牟呂八幡宮などの寺社のほか、牧野伝蔵(中村)・岡田秀吉(市場)などの個人が寺子屋を開いている。

(5) 明治・大正・昭和(戦前)

磯辺村から牟呂村、牟呂吉田村へ　慶応3年(1867)10月江戸幕府は大政奉還をし、明治新政府が誕生した。新政府は廃藩置県、地租改正、学制公布、戸長制度の制定等各種の改革を行い近代化の方向へと進んだ。牟呂村は明治4年(1871)廃藩置県に伴い豊橋県の管轄となったが、同年11月には額田県となり、同5年11月には愛知県の管轄となった。

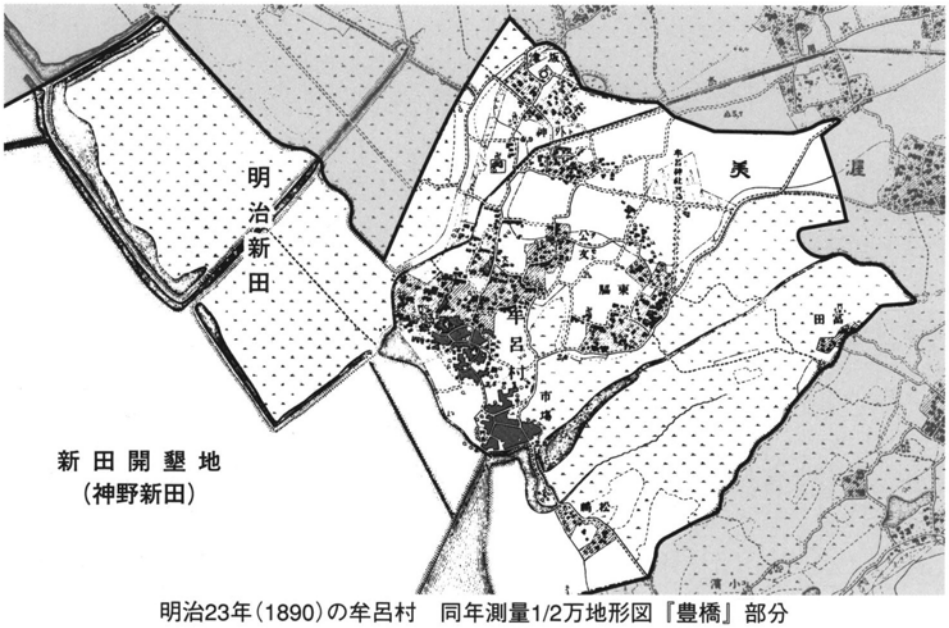
この間、村々の統合も進められ、明治11年12月、上牟呂村・中牟呂村・下牟呂村・松島新田・富田新田・上ノ原新田・向草間村・草間村・松井新田が合併して磯辺村ができた。初代の戸長は市場の岡田政吉、二代は大西の加藤七三郎であった。戸長の職務は、布告・布達の徹底・地租及び諸税の納付・戸籍及び徴兵の調べ等13項目にわたっていた。

しかし、この合併は立地条件や実情に合わないところが多かったため、区域を住民の生活圏に合わせるよう手直しが行われ、牟呂は同17年8月独立して牟呂村となった。村としての区域は、上牟呂村・中牟呂村・下牟呂村・松島新田・富田新田であった。

その後、明治38年愛知県知事は訓令を出し、財政規模の小さい町村は合併し、より良い行政のできるよう指導を行った。これにより牟呂村は吉田方村と合併し、明治39年7月牟呂吉田村が成立した。戸数は1,162戸で人口は6,899人であった。村役場は両村の中間に近い牟呂の坂津に設置された。この牟呂吉田村は昭和7年(1932)9月豊橋市と合併するまで存続した。

新田の開発　明治に入っても、牟呂の人々の生活は田畑の耕作と海からの藻草採りや貝や小魚の採取が主であった。このため周辺新田の再開発などに積極的に参加した。

明治新田　文政3年(1820)吉田藩士福島献吉によって開発された富士見新田は、嘉永7年(1854)の地震や暴風雨などで度々破損し、さらに各地の豪商などに売却され、藩の手を離れていった。また、名称も東は富久縞新田、中は中富士見新田、西は吉尾新田と呼ばれるようになった。明治3年の暴風雨により三つの新田は荒廃し、富久縞新田はすぐに修築されたものの、他はそのままとなっていた。牟呂村の牧野彦蔵、杉浦治郎三等は荒廃した地に新田再開発を計画し、明治12年(1879)「新田築立願」を県へ提出し許可された。



明治23年(1890)の牟呂村　同年測量1/2万地形図『豊橋』部分

工事費は1万7千円で、翌13年4月工事に着手し8月に竣工した。新田面積は13町8反余であった。これにより牟呂村の人々は住居の近隣に田畑を持つことができた。

神野新田　明治20年(1887)、旧山口藩の毛利祥久は同郷の愛知県令勝

間田稔の勧めに従い、牟呂村地先の干潟に新田の開発を計画し、翌21年には新田への用水として豊川上流（現新城市一鍬田）より約24km余の牟呂用水を完成させた。新田工事も同年着手したが、高波等の被害により工期は延び、同23年５月に完成し、「吉田新田(毛利新田)」と命名した。しかし、翌24年10月に発生した濃尾大地震により堤防が破損し、さらに同25年９月の大暴風雨のため堤防が決壊し、130余軒の住居は押し流され、一部の堤防を残して新田は海原に帰してしまった。

毛利祥久は新田の再築をあきらめ、明治26年新田全部と用水路の権利を神野金之助へ譲渡した。

毛利新田堤防澪止めの様子（明治22年）

神野金之助は額田郡菱池の干拓に成功し、墾田事業に意欲を持っていた。明治26年６月より干拓工事を始め、服部長七の人造石工法を採用することによって、９月には堤防工事は完了し、千百町歩（約千百ha）の新田が現れた。そこで稲の植え付け等も始め、明治29年４月神野新田成工式が神富神明社で行われ完成を祝った。

牟呂発電所　明治27年(1894)豊橋電灯株式会社が設立され、牟呂村大西の牟呂用水に樋門を作り水力と火力による発電所の建設を行い同28年９月竣工した。しかし、明治41年電力不足に対応するため南設楽郡作手村に新しい発電所が建設され、牟呂発電所はわずか13年で閉鎖された。

牟呂発電所樋門跡

大正から昭和の農業　大正７年(1918)の村勢要覧によると、牟呂吉田村で作付けされた作物は米が最も多く、次いで大麦、根菜類（大根、サツマイモ等)、瓜果類(うり、西瓜等)となっている。

大正９年の牟呂吉田村の農家戸数1,043戸の内、自作農は230戸、小作は330戸で、自作兼小作農は483戸で全体の約半分を占めている。

明治中頃から昭和10年(1935)頃までの約50年間は牟呂の畑の多くは桑畑であった。大正７年の統計では牟呂吉田村の畑の56%は桑畑で、牟呂の台地上に集中していた。桑の葉は蚕の餌で、農漁業の副業として蚕を飼い、蚕都と呼ばれた豊橋の繭の供給地であった。

豊橋市への合併と戦争　昭和７年(1932)９月１日、牟呂吉田村は高師村、下地町等とともに豊橋市と合併した。すでに豊橋市は大正12年には周辺町村を含んだ都市計画を策定しており、近代都市化・工業化には周辺町村との合併は不可欠であり、財政基盤の乏しい周辺町村にとっても経済活動や市民生活上密接な関係にある豊橋市との合併は好都合であった。また、豊橋市にとって牟呂吉田村との合併は工業都市化の促進、特に臨海工業地帯の形成と豊橋港の整備にとってぜひとも必要であった。昭和８年から築港調査が行われ神野新田（現在の総合スポーツ公園付近）に港湾を築く計画が策定され、昭和12年から工事は開始されたが、折からの日中戦争勃発により

一部の護岸が完成したのみで中止となった。

昭和12年(1937)日中戦争が勃発し、翌年国家総動員法が制定されると、市民の生活は国家の統制を受けるようになった。昭和15年には米、麦、いも類などの食用の作付けが優先され、牟呂台地一帯の桑畑も甘藷や麦の畑に変わっていった。さらに物資や食料の配給制が始まり、米の配給がスムーズに行われなくなったが、牟呂はほとんど農家で自家用の食料は確保していたので、豊橋市街の人々が牟呂の農家に米などの食料を求めて買い出しに来るようになった。

戦争の拡大により多くの将兵が必要となり、牟呂でも補充兵や志願兵として多くの若者が戦場に赴いた。牟呂校区尚武会の記録では昭和12年～20年の間に733名が入隊している。また、昭和19年以降になると国民学校高等科2年生の生徒も近隣の軍需工場へ動員された。昭和20年8月7日の豊川海軍工廠の爆撃では11名の牟呂の人々が亡くなっている。

同年6月20日の豊橋空襲では牟呂も被災し、社寺では牟呂八幡宮、素盞嗚社(天王社)、楽法寺、民家では大西、公文、松島、東脇などで約50世帯が被災した。

(6) 昭和(戦後)

変わる暮らし　昭和20年の終戦を境として牟呂の様相は大きく変わった。農地改革に始まり、三河港造成に伴う漁業補償、柳生川沿岸区画整理とそれに関連する道路網の整備、牟呂区画整理の実施である。農地改革により神野地区を中心に多くの自作農が創設されたが、海苔養殖を中心とする漁業補償の妥結により、牟呂の人々は海から離れることとなる。これにより海苔・アサリ等の現金収入が見込めなくなり、他の職業への変更を余儀なくされた。さらに若者のサラリーマン化指向が強まり、兼業農家が飛躍的に増加した。この後牟呂土地区画整理事業の完了により住環境は大きく変化し、住宅も道路も景観も、昔の面影はほとんど無くなった。校区周辺には豊橋西高等学校、ライフポートとよはし、市民病院、総合体育館等の公共施設が建設され、大型商業施設の進出、住宅・マンション・アパート等の建設により人口増加が進み、牟呂校区は新たな歩みを始めようとしている。

農地改革　農地改革は自作農家創設を目標として昭和21年から実施された。牟呂においても多くの自作農家が誕生し、昭和25年にはほぼ完了した。このうち神野新田における農地解放は農地改革に先行する形で地主が自主的に開放したところに特徴がある。神野新田土地株式会社の理事長神野三郎は、昭和21年2月耕地650余町歩(約650ha)を小作者500余名に解放した。国の解放令では2町1反歩以上の農地は持てなかったが、神野新田ではすでに農地を開放した後であったので、それ以上の農地を持つ者も多かった。

豊橋港の開港と各種施設の新設　昭和38年7月豊橋を中心とする東三河地域が工業整備特別地域に指定され、続いて翌39年4月には豊橋港を中核とする三河港が重要港湾に指定された。三河港造成には漁業補償問題が大きなネックとなっていたが、昭和46年に妥結し、翌年豊橋港として開港した。以後順調に港湾整備は進み、埋め立て地への各種企業の進出も進んだ。平成5年(1993)以降は自動車輸入台数・金額とも日本一を続けており、日本を代表する自動車輸出入の港湾となっている。

(7) 区画整理以後の変遷

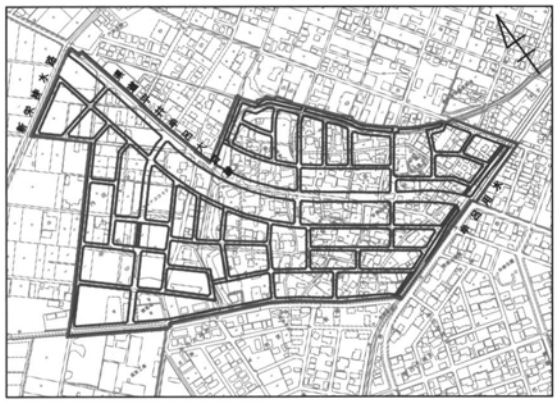
東脇地区区画整理　牟呂地区は豊橋駅西側に、また三河港の後背地にもあたり、商業地・住宅地として発展の可能性を有する位置にあった。このため、昭和33年(1958)、東脇地区を中心とした柳生川沿線土地区画整理事業が決

定された。事業は豊橋市街と豊橋港を結ぶ幅員22ｍの大動脈(みなと大通り)の設置と、その沿線81haの宅地化で、15年にわたる歳月を費やし昭和47年完工した。これにより東脇地区及び柳生川沿線は区画整理による整然とした住宅地となった。平成２年(1990)には汐田小学校が新設され、汐田校区ができた。

牟呂地区区画整理　東脇地区に続いて牟呂地区の牟呂土地区画整理事業が昭和54年～平成17年までの期間で実施された。これにより82haの区画整理が行われ区域内には大小の公園が整備されるなど整然とした住宅街となり人口も急増した。22・23頁に掲載した昭和36年(1961)と平成10年(1998)の牟呂地区の航空写真を比較するとその違いは明らかである。

区画整理確定後の牟呂地区の町名と街路

坂津地区区画整理　牟呂地区に続いて坂津地区の区画整理事業が始まろうとしている。坂津地区は牟呂の最も北部に位置しており、神野新田を除く牟呂校区で最後の未整理地である。平成13年より27年までの計画で約21haの地域を整理し、宅地化するものである。これにより、細葉（槙の木）に囲まれた屋敷が密集し、細い道路が網の目のように走る、牟呂の景観は姿を消すこととなる。


坂津地区区画整理計画図

区画整理以後の変遷(地名)　地名は、土地の自然環境や歴史などを表すもので、地域の特徴や成り立ちを表す貴重な資料と言うことができる。江戸時代には村内の比較的小さな地域や特定の場所(坂道や池等)を人々が自然環境や地形、故事などにちなんで呼んでいた。これを小字と呼んだが、明治時代初めの地租改正の際いくつかの小字がまとめられ、現在の字となった。牟呂には区画整理が行われて新町名が設定されるまでに、下記のように多くの字があり、自然環境や地形、歴史を想像することができた。区画整理の結果、いくつかの字名は消滅してしまったので、地域の文化財として記憶しておくことも重要である。

古幡焼、奥　山、松　島、松島東、古　田、角　田、松　東、細　田、扇　田、中　西、松　崎、東　里、蒲　原、百　間、南汐田、北汐田、大　塚、五郎七、川　添、市　場、作　神、大　西、築　根、大海津、真裏口、水　神、若　宮、内　田、境　松、三ッ山、坂　津、外　神、八王子、一本木、郷社裏、市　道、公　文、田　成、中　村、桶口下、元　浜、行合前、行　合、東　脇、　林、　見丁塚、南大門、柳　原、井ノ瀬、大師孝、坂　下、郷　社、郷社東、往還西、往還東

明治15年（1882）「愛知県地名集覧」の字名一覧

昭和36年（1961）の牟呂地区航空写真

昭和36年頃は台地と低地の境界がはっきりしている。台地上は主に集落と畑で、集落は江戸時代以来の細い網の目のような道路に囲まれ密集している。低地はほとんどが水田と養鰻池である。市場港には漁船が多数係留されている。牟呂小学校南から東に延びる直線の道路は、東脇地区の区画整理に伴い新設された、現在のみなと大通りである。

平成10年（1998）の牟呂地区航空写真

平成10年には、東脇地区に続いて牟呂地区の区画整理もほぼ完了し、坂津地区を除いて、牟呂の姿は一変した。宅地造成により台地から畑は姿を消し、区画された住宅街となり、台地と低地の境界は不明瞭となった。柳生川周辺の低地も宅地化された。そこに、平成２年(1990)開校した汐田小学校の姿が見える。

昭和36年（1961）の神野地区航空写真　この頃の神野新田地区は干拓後移り住んだ人々の集落と一面の田であった。

平成10年（1998）の神野地区航空写真　国道23号バイパスが開通し、みなと大通りより南側は商工業・住宅用地となった。

2　産　業

牟呂の産業としては、米づくりを中心とした農業と、海の恵みとしての漁業、そして、区画整理後、地域を大きく変貌させた商業がある。

(1)　牟呂の農業の移り変わり

稲の早期栽培の導入　昭和28年(1953) 9 月25日夜半襲来した13号台風は、神野新田の堤防決壊という未曾有の災害をもたらした。収穫を目前にしていた神野新田の水田は、完全に水没し大海原と化した。翌29年には、この教訓を踏まえ、農業試験場や普及所等の勧めもあって、収穫期を早めた稲の早期栽培が試みられた。当初は、海水による塩害の心配や、初めての早期栽培の取り組みに対する不安も交錯したが、良好な結果を得た。

稲の早期栽培が定着したのは、昭和33年(1958)頃で、翌34年の伊勢湾台風の時には、ある程度早期栽培が普及していて被害を最小限にとどめることができた。その後現在に至るまで、稲の早期栽培は、安定した収穫をもたらし、またたく間に、牟呂地域全体に浸透した。4 月中・下旬に田植えが始まり、8 月下旬には取り入れを終えるということで、台風シーズンを避けた栽培方法が定着した。栽培技術の進歩や銘柄米のコシヒカリへの品種改良・育苗センターの充実等もあって、反当収量も飛躍的に増加した。

田植風景（田植え機）

収穫風景（コンバイン）

農作業の機械化と化学肥料の導入　農機具導入前の田畑の農作業は、人力と畜力（主に牛）が中心であったため、時間がかかる割に能率は悪かった。農繁期における農家では、朝早くから晩遅くまで働いた。とりわけ、家族が少ない農家では人手が足りず親類・縁者等で助け合った。昭和30年代に入ると、時代の進展・文明の進化は、農業経営でも、下のように機械化に拍車をかけた。

農作業の機械化

	農作業の機械化への推移		
	人　力 →	畜　力 →	機械化
田起し	備　中	牛利用	トラクター
田植え	四条植	井げた植	田植え機
田の草	3～5回	コ　ロ	除草剤散布
稲刈り	手がま	バインダー	コンバイン
稲こき	こばし・千歯こぎ	動力脱穀	コンバイン
籾干し	天日干	天日干	乾燥機
調　整	唐　臼	籾すり機	センター

化学肥料導入前の肥料は、堆肥や人糞、緑肥、家畜の糞、菜種粕、魚紛等であった。したがって、第十五師団の馬糞や市街地の糞尿などを競って取りに行った。どこの農家でも、肥瓶と堆肥小屋を持っていた。化学肥料は、俗に金肥といわれ、昭和の初期頃から導入され始め、肥料三要素を配合した各種肥料は、

人糞にとって変わった。化学肥料は、農家の労働力を軽減し、生産性を高めたが、多使用の影響により、地力の低下は新たな問題となってきた。

農業経営の現状　牟呂校区は、これまで半農半漁を基本とした生活形態をなしており、夏場は稲作とアサリ採り、冬場は海苔の養殖と水田の裏作といった具合であった。ところが、昭和35・36年（1960・61）頃から始まった高度経済成長と、それに伴う三河湾の造成と漁業補償、さらに区画整理は、これまでの牟呂の村落構造と生活基盤を根底から変えていった。

2000年農業センサスにみる農家数調査

地区名	農家数	専業農家	兼業農家の内訳	
			第一種	第二種
中　村	25（50）	5	4	16
市　場	27（96）	2	1	24
大　西	48（82）	8	17	23
公　文	37（70）	8	5	24
外　神	21（41）	5	4	12
坂　津	19（35）	1	4	14
三　郷	148(218)	27	39	82
計	325(592)	56	74	195
			269	

（　）内1985年の調査

農業センサス（2000年）で牟呂校区の農家数の推移をみると、この15年間に農家数は約55%と大幅に減少し、267戸が営農をやめていったことになる。さらに、専業農家は、わずか17%程度しかなく、兼業農家が圧倒的に多くなっている。しかも、第二種兼業農家の割合が55%以上となり、脱農化に一層拍車がかかっていることを数字は示している。こうした傾向は、全国的な流れでもあり、農業人口の高齢化と若年層の農業離れは、単に牟呂校区だけの問題ではない。特に、牟呂校区のように、稲作を中心とした農業経営では、国の減反政策・米の生産調整政策や低米価が、一層脱農化に拍車をかけているともいえる。

そうしたなかで、脱農家や兼業農家の耕地を借り受けた、豊橋農協受託協議会（通称:オペレーター組合）による大規模経営による取り組みや、法人経営の形態をとる動きもわずかではあるが出てきた。いわゆる、農業経営の両極分解である。ちなみに借地者への還元は、米に換算して30～60kg（10aあたり）相当分である。

豊橋農協（牟呂）の水田受託協議会の現状（ha）

農家	経営耕地	田植え	稲刈り	乾燥
A	18	1.5	5.3	5.3
B	1.2	3	35	10
C	3.75	2	—	26
D	15	4.3	25	20
E	7	4	14	14

（平成17年度）

一方、稲作以外の農業では、野菜づくり（トマト、ミニトマト、ナス、いちご）等があるが、農家数の割合も栽培面積もあまり多くない。これは、農地の多くが低地で、米づくりを基本とした農業形態であることと用水の問題、農地の宅地化等、諸々の条件の絡みがある。せっかく牟呂用水が通っていても、通年通水がなされていない現状では、致し方がない。

施設農業（いちご栽培農家）

また、酪農と畜産についても、飼養農家数は少ないが、飼育頭数は割合多く大規模な経営が行なわれている。かつて、農家が数頭単位で飼育していた乳牛や豚も、商業ベースに乗らないことや、糞尿の環境基準強化等の問題で淘汰されていった。

2000年農業センサスにみる施設園芸と畜産

地区名	野菜類		花卉・花木		乳用牛・肉用牛		豚	
	農家数	栽培面積	農家数	栽培面積	農家数	飼育頭数	農家数	飼育頭数
中　村	2	64a	—	—a	—	—頭	—	—頭
市　場	—	—	—	—	—	—	—	—
大　西	12	302	2	55	—	—	—	—
公　文	5	74	1	15	—	—	2	3,120
外　神	4	80	2	63	—	—	—	—
坂　津	1	26	2	17	—	—	—	—
三　郷	17	465	1	13	3	337	—	—
計	41	1,011	8	163	3	337	2	3,120

育牛農家

牟呂の農業の展望　上で述べてきたように、経営規模を拡大し後継者も確保して、企業経営として取り組む動きも見られるが、牟呂の村落構造はこれまで以上に弱体化し、今後は農業に依存しない世帯がますます増えることが予測される。その結果、次に掲げるようなことが問題点となってくる。

①土地相続の関係で、市外や県外に在住する人の所有地が増えつつあるため、農地の荒廃化が出てきた。

②大規模経営に伴い、薬剤散布や化学肥料の多用により、土地の劣化が起こる。

③平成18年5月より実施される食品衛生法・ポジティブリスト制度（禁止された状態で、使用を認めるものについてリスト化するもの）により、病害虫防止の薬剤散布に対する規制の影響等が、心配される。

(2)　海と牟呂の人びと

海のめぐみ　牟呂の歴史を述べるときには、海のめぐみを抜いては語れない。とりわけ、豊川と梅田川河口の東西2里余、南北3里余の海面（六条潟）は、牟呂の人々の生活の場でもあった。

江戸期の牟呂近辺の農家一戸あたり平均持高を見ると、前芝・牟呂・大崎・梅藪など六条潟沿岸の村々は特に少ない。それは、田畑が少ないことを意味し、田畑に比べて人口が多いことを表している。それでも生活を可能にしていたのが、牟呂地先の海（六条潟）のめぐみと考えられる。牟呂の人たちが海をまもることや、その利用権の確保に必死になっていたことも想像できる。

江戸時代後期六条潟周辺村々の一戸平均石高表

一戸平均持高		一戸平均持高	
馬見塚	6石72升	東植田	7．80
牟　呂	**3．37**	野　依	8．25
草　間	4．29	大　津	4．31
小　浜	8．82	杉　山	7．11
大　崎	3．79	牛　川	8．47
花ケ崎	6．79	多　米	6．54
橋　良	5．96	前　芝	2．12
小　池	7．16	梅　藪	3．70
高　足	9．19	—	—

とりわけ、六条潟では、アサリやハマグリなどの食用貝類のほか、藻草やニラ、ヨラメ（キサゴ）などは大切な肥料となった。

特にヨラメは、牟呂の近海で多量に発生したので、乾燥・貯蔵し貴重な換金海産物でもあった。

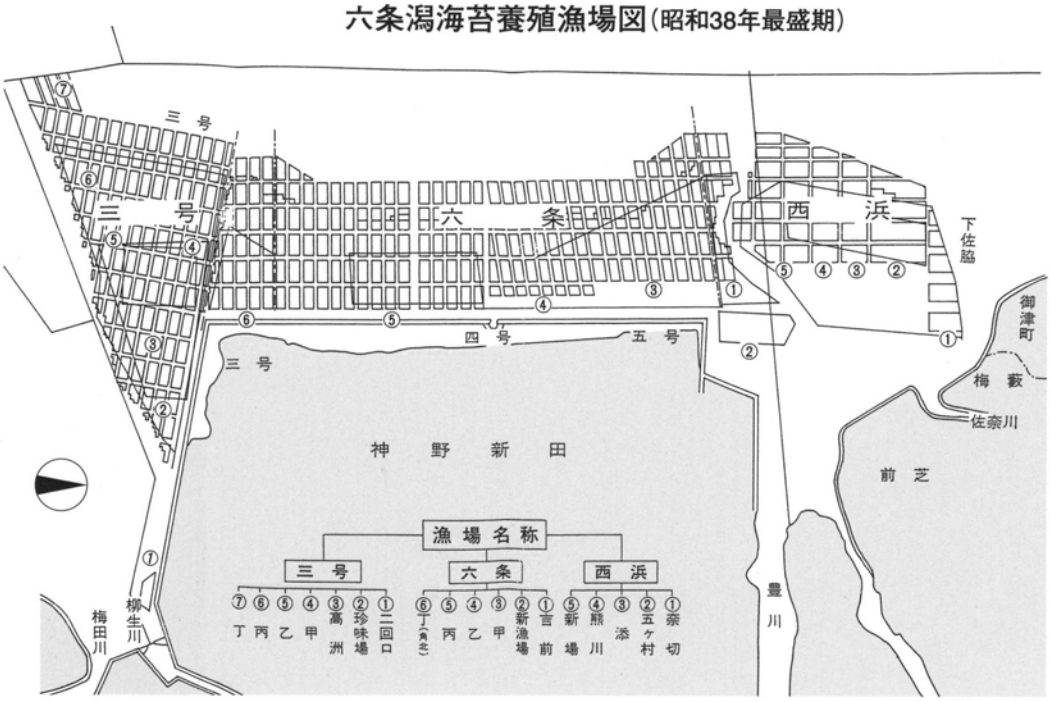
海苔の養殖　海苔の養殖は、江戸時代末期の安政年間に、前芝の杢野甚七（もくのじんしち）が創始したとされる。明治26年(1893)には、牟呂大西の芳賀保治が毛利新田（神野新田）の堤防の決壊箇所を舟で巡視中、二十間川付近の枯れ葦に海苔が付着しているのを見つけた。翌年には私財を投じて、粗朶（そだ）で実験し成功したことがきっかけとなって、牟呂地先の六条潟一帯に広まった。その後、養殖方法の研究と改良が加えられ、養殖区域も拡張され、海苔養殖従業者・生産額も著しく増加した。明治36年(1903)には、牟呂漁業協同組合が結成され、海苔の養殖事業は組合事業として運営されるようになった。牟呂漁業協同組合の設立当初の組合員数は、253人であった。

六条潟　網ひびによる海苔漁場風景

漁業組合の推移

明治36年	牟呂漁業協同組合の結成
昭和13年	保証責任牟呂漁業協同組合
昭和19年	牟呂漁業会
昭和24年	牟呂漁業協同組合
平成７年	豊橋市漁業協同組合
平成12年	豊橋市漁業協同組合の解散
現　　在	愛知県漁業協同組合豊橋支所

六条潟海苔養殖漁場図（昭和38年最盛期）



舟番
1.坂津
2.外神
3.東脇
4.公文
5.大西
6.中村
7.市場
8.松島
9.三郷

六条潟の海苔採取

第２次世界大戦後半は、作業力の不足、ひび材料の入手の困難さ等の要因により、生産額は減少するが、戦後は、昭和23年(1948)頃から生産体制が整い、三河海苔の産地として全国的に評価されるようになつた。

昭和30年代に入ると、漁法の開発、養殖技術の向上、各種機器の開発により生産は飛躍的に上昇した。牟呂の場合、昭和30年代後半の5年間は、海苔養殖の黄金時代で、特に昭和38年(1963)度の単一漁協別共同販売出荷金額は、約７億５千万円となり、海苔生産者も921人を数え日本一の海苔生産地となった。

港づくりと漁業補償　海苔の最盛期は、わが国の高度経済成長期とも重なり、牟呂の海苔養殖も過渡期・大きな課題を抱えることとなる。それは、神野新田の沖合に三河港を造成し、臨海工業地域の開発をしようとする愛知県・全国単位の大規模な構想が、着々と進んでいたのである。海苔の生産がピークの昭和38年(1963)に、東三河工業整備特別地域の指定と、翌年には、三河港が重要港湾としての指定を国から受けた。

こうした動きに対して、牟呂・大崎漁協を中心に六条潟沿岸の漁協が、漁民の生活を守る立場から、三河港造成への反対運動が広まった。

しかし、昭和40年(1965)の海苔養殖は大変な不作だったこともあり、県当局から示される漁業補償額に、漁民の心は動いた。結局

海苔干作業

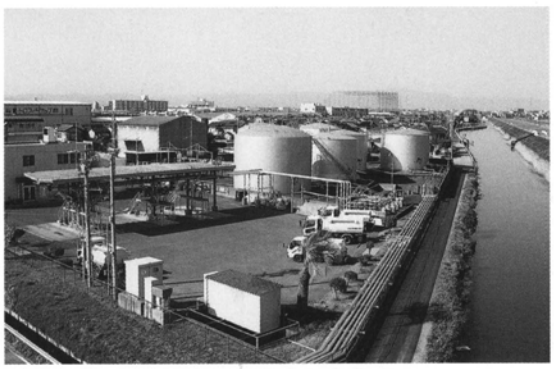
は、時の流れに抗しきれず、昭和42年次のような金額で妥結をみた。

補償金の配分額（牟呂漁協分）

1.　海　苔	―526,100万円
2.　あさり	― 43,100万円
3.　他　種	― 24,500万円
合　計	593,600万円
※　対象組合員	1,146名
（正組合員　1,080名　準組合員　66名）	
最高	1,350万円
最低	30万円

(3) 牟呂の商業と事業所

幹線道路周辺の変貌　牟呂校区は、区画整理によって大きく変わった。しかし、区画整理の対象外であった神野地区の航空写真(24頁)で昭和36年(1961)と平成10年(1998)のまちの様子を比較してみると、37年間の時間が、こうもまちを変えるかと思わせるくらいに変わっている。それは一般県道豊橋港線(通称:



混在する住宅と事業所

みなと大通り、1・3・3道路）と一般国道23号豊橋バイパスの2本の道路によるものである。この道路開通前は、新田特有ののどかな田園風景がそこにはあった。ちょうどこの時期（昭和40年代）は、高度経済成長期とも重なり、市街地化の波は、比較的地価も安く、また農地法の規制の弛んだ神野新田地区へ押し寄せ、町の形態を大きく変えた。

幹線道路周辺の事業所　牟呂校区における商店や事業所は、中･小規模経営のものが多い。

牟呂の商業・商店数（飲食店を含む）

区分／年	牟呂	
	商店数	従業員数
昭和51	124	542
54	140	533
57	170	769
60	145	860
63	162	1,063

区分／年	牟呂		汐田	
	商店数	従業員数	商店数	従業員数
平成 3	127	966	62	544
6	133	1,230	60	436
9	126	1,230	69	519
14	119	1,208	69	584

なかでも、比較的大きなものは、広い土地の確保が容易な神野新田地区に集中している。

豊橋市の中心部から移転してきた地元事業所や、レジャー的なサービス産業、全国的なチェーン店、コンビニエンスストア等である。しかし幹線道路以外の道路は、農地整理以来の旧農道であることや、事業所と住宅・マンション等が混在し、計画的なまちづくりでなかったため、交通事情はすこぶる悪い。

農村型から都市型へ　牟呂校区のイメージは、昔から「下条七村、大村八村、牟呂にゃかなわぬ九の村」と言われてきたように、豊橋西部地域の中心でもあったが、農村型のイメージも強かった。いま写真や表から牟呂を見ると、牟呂は大きく変わってきた。産業も、これまでの第1次産業が大きく減少し、第2次・第3次産業へと移行してきた。いわば、農村型から都市型の地域へと変貌してきた。

大型店・事業所の進出

牟呂の工業・事業所数

区分／年	牟呂	
	事業所数	従業員数
昭和50	69	1,475
55	79	1,154
60	70	1,244
平成元	64	1,389

区分／年	牟呂		汐田	
	事業所数	従業員数	事業所数	従業員数
平成 5	39	862	25	608
9	36	882	25	635

農村型から都市型に

3　生　活

(1) 体育活動

現在校区民が最も一体感をもって取り組む行事が「校区体育祭」である。「牟呂の会」で始まったこの行事も、児童生徒の参加によって運動会となり、本年で25回を数えるまでに継続されてきた。

綱引き、むかで競走、玉入れ、玉送り、年齢別リレー等、市の大会に結びつく町内対抗競技をメインに、和太鼓演奏や消防団の放水試技等盛りだくさんの出し物で、校区民のふれあいの輪を大きく広げる場となっている。

校区運動会風景

この他、各町内が参加するドッジボールやソフトバレー大会があり、さらに、少年野球や剣道クラブも組織され、日頃の練習の成果を発揮するとともに、運動を通して交流の輪を広げている。

牟呂八幡宮祭礼奉納試合（牟呂剣児会）

豊橋市制施行100周年記念の本年は、牟呂校区地域イベントとして、校区民が一致団結し、将来まで心に残るスケールアップした大運動会・納涼祭を企画した。

とよはし100祭記念“ええじゃないか牟呂”

『心ふれあうふるさとづくり』をテーマとし、子どもからお年寄りまで笑顔いっぱいの運動会、次の世代を担う子どもたちの思い出に残る運動会、地域に愛着が深まる運動会を合い言葉に大運動会・納涼祭を９月10日、牟呂小学校で開催した。

＜第一部：100祭記念牟呂校区大運動会＞

例年の人気競技に100祭記念競技を盛り込んで開催した。

- ○町内対抗競技
  市大会への予選競技がメイン
- ○幼・保園児、小・中学生合同参加種目
  鼓笛隊、吹奏楽の演奏
- ○幼児と高齢者のふれあい種目

＜第二部：100祭記念牟呂校区納涼祭＞

大運動会でできたふれあいの輪をさらにお祭り気分で一気に盛り上げ、思い出に残る校区全体の総踊り大会として納涼祭を開催した。

- ○和太鼓演舞（三河神富太鼓）
- ○大抽選会
- ○牟呂校区民総踊り（ええじゃないか牟呂）
- ○花火フィナーレ

和太鼓演舞

牟呂校区民総踊り

(2) 市民館活動

市民館は、社会教育法によると、「一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする。そして、その目的達成のために、①定期講座の開設、②討論会・講習会・講演会・展示会等の開催、③図書・記録・模型・資料等を備えその利用を図る、④体育、レクリエーション等に関する集会の開催、⑤各種の団体、機関等との連絡、⑥施設を住民の集会その他の公共的利用に供する。」とあり、それに従い活動を展開している。

市民館には、小学校単位の校区市民館（学習の場として、また、校区のコミュニテイの場として利用し、小学校の校地内にある）と中学校単位の地区市民館(サークル活動･研修会など生涯学習の場として利用する）があるので、使用目的に応じて使い分けることができる。ただし、原則として校区市民館は無料、地区市民館は有料である。市民の活動に場所を提供するのが市民館の仕事ではあるが、市民館側から校区民に発信するイベントの最大のものが、市民館まつり（文化祭）である。しかも、当校区は校区市民館･地区市民館合同で開催するのでその規模は大きい。

市民館まつり（平成17年度）

10月29日（土）

○作品展（9：00～20：00）

作品は保育園・幼稚園児、小中高校生、一般の人が1,500余点出品する。内容も、絵画、書、手工芸品、人形・ぬいぐるみ、布絵、和紙ちぎり絵、藍染め等多種多様である。毎年、数的にも質的にも向上しており、まさに、ミニ造形パラダイスで、家族連れの観客が多い。

作　品　展

10月30日（日）

○作品展（29日に続いて：9：00～15：30）

○芸能大会（10：00～15：30）

カラオケ、ダンス、三味線、舞踊、詩吟、太鼓、エアロビクス、空手等バラエティーに富み、その数68組に及ぶ。

芸能大会

○バザー（10：00～15：00）

総代会、自警団、社教女性部、小中ＰＴＡが中心になり、団子・大福餅を販売する。

バザー

生涯学習社会を迎え、市民館は今後も市民の学習・コミュニテイ活動の拠点としての役割を担い続ける。

(3) 牟呂用水美化運動

牟呂用水は、豊川上流新城市一鍬田地先で取水され、豊橋市賀茂町照山の分水口で松原用水と分流し、牟呂市場町の最終樋門まで流れ、三河湾に注ぐ、全長24㎞の用水である。

牟呂用水は、明治21年通水以来今日まで、豊橋の豊かな穀倉地帯である賀茂・牟呂などの水田に、農業用水を供給してきた。今でも牟呂用水は、農業発展の原動力としての役割を果たし豊かな農業生産の一翼を担っている。

しかし、かつては子どもたちが水遊びをし、魚捕りをした清流の牟呂用水も、昭和30年代頃から、生活排水やゴミの投げ捨て等により年々汚れてくるようになった。

このように汚染されていく牟呂用水を見て、農業従事者や総代会が立ち上がった。豊橋の中心部を流れる牟呂用水が、ゴミで汚れて不潔になり、美観を損ねている事実を、校区民や市民、関係機関に訴えた。

地元の牟呂では、総代会が中心となって牟呂用水清掃活動を開始した。昭和51年(1976)６月には、牟呂中学校の生徒会が「牟呂用水を清流に」と校区民に呼びかけ、「牟呂用水美化サークル」が発足した。

生徒会の活動は次第に広がり、校区各種団体はもとより、用水沿いの小中学校の協力も得られるようになり、美化サークルの輪は大きくなった。清掃の実践活動を行うとともに、用水美化パトロール、啓発用立看板の設置などの運動を行ってきた。

以後、「牟呂用水を清流に」の精神は連綿と受け継がれている。最近は活動の主催が牟呂中校区青少年健全育成会に移ってはいるが、平成17年度には第31回を数えるまでになっている。

牟呂用水清流化運動（平成17年度活動計画）

○ねらい

校区の人々と活動することにより、校区の一員としての自覚を高めるとともに、校区を愛する心を育てる。

○日　時　平成17年10月31日（月）
13:15～16:00　＊雨天中止

○活動内容

牟呂用水とその周辺のゴミ拾い及び除草

○参加予定団体

総代会、青少年健全育成会、小中学校ＰＴＡ・児童・生徒・職員、牟呂用水土地改良区、自警団、消防団、造園組合、市環境部環境政策課、一般市民

○日　程

・集　合　牟呂中学校運動場　13：15
・開会式　運営：牟呂中生徒会　13：20
・移動開始、活動開始　13：30
・活動終了、解　散　15：30

牟呂用水は、市街地を流れる全国的にも珍しい用水であり、牟呂用水清流化運動に取り組む校区の人々の姿は、豊橋市民のかけがえのない貴重な財産である。530運動発祥の地の名誉にかけても、清流化運動をいつまでも続けてほしい。

小・中学生の清掃活動の様子

(4) 自警団と消防団

自警団は、今では貴重な存在になっており、豊橋市内でも数えるほどになってしまった。その自警団を各町内会でもっているのが牟呂校区である。町内で火事がおきれば、いち早く駆けつけ初期消火に威力を発揮する。

自警団消防ポンプ（中村町）

区画整理前の牟呂は、道がいりくんでおり、しかも狭かった。いったん火災を起こすと、市の消防車は火元まで入ることができず、遠くの消火栓からホースを長く引っ張って消火活動をしなければならなかった。一刻を争う火事現場では、時間的なロスは相当なものであった。

その点、自警団の消防ポンプは、手押し車ではあるが、狭い道でも容易に火事現場に入り込めるので、常に現場に一番乗りができる。

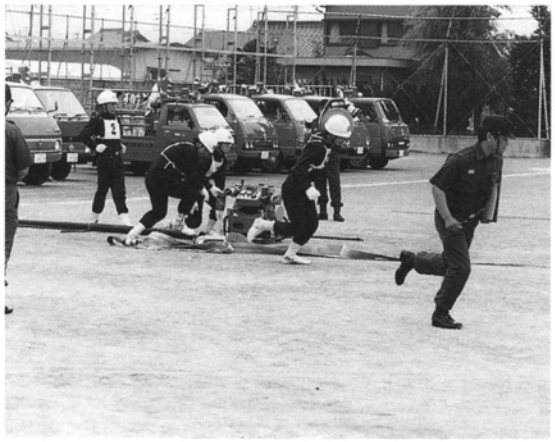
区画整理後の様子はどうかというと、やはり自警団の現場到着の有利さは変わらない。地元の人間であるため地理や住宅をよく知っているからだ。

また、祭りになれば、幟立てや警備、餅投げ等に大活躍をしている。さらには、火災予防週間に町内のパトロールを、年末には夜警も実施している。常に町民の安全を守ってくれる縁の下の力持ち的存在である。

万一火災が起きたときに備えて、校区自警団放水競技大会が毎年開催される。これは、団員の消防器具操作の技能を高め、かつ団員の結束力を強めるのに効果が大きい。各町内会の自警団は、大会の前から早朝訓練や夜間訓練を繰り返し、当日に備えている。

牟呂の自警団の特色として、団員の年齢が若いことがあげられる。学校卒業以降満37歳まで自警団活動に参加し、翌年退団となる。ただ、最近はどの町内会も団員数（特に実動者数）の減少に悩んでいるのが実態である。

一方、市の組織である豊橋市消防団第七方面隊牟呂分団の団員については、他の校区のほとんどがその選出に苦慮しているが、牟呂校区の場合は、自警団員から適当な人を選出しているので、人員確保等、連絡調整はうまくいっている。校区内には消防器具庫が２か所（牟呂外神町、神野新田町）あり、人員は分団長以下27名である。


消防団（第七方面隊）操法放水大会

市の消防団（第七方面隊）も自警団と同様、毎年小型ポンプの操法・放水競技会を開催している。牟呂校区は自警団から選りすぐりの団員を送り込んでいるため、近年は非常によい成績を収めており、平成16･17年度には、操法、放水ともに優勝している。

以上のように、自警団・消防団ともに校区の防災・安全の要として、今後とも活躍してくれることを期待している。

(5) 老人クラブ、成人式

老人クラブ　高齢化社会になったため、どの町内も百数十名から二百有余名の会員数を抱える。しかも、元気の良い高齢者が多く、多方面で活躍されている。60才で加入という町内もあるが、65才で加入する町内が多い。原則任意加入なので、最近は加入者が減る傾向にある。

○活動内容

神社境内や公園、公民館の清掃、交通安全市民運動時の交通安全指導、町内会・校区の行事への協賛参加等の活動はどの町内もやっている。一人暮らしや寝たきりの方を年一回訪問する町内もある。

○行事

年４～６回の例会(敬老会を含む)、校区の親睦旅行２回(町内は別)、演芸大会のほかに、市の行事のブロックスポーツ大会、ブロック演芸大会、福祉大会等に参加している。

○その他問題点等

元気な高齢者が多いのだが、最近は各行事・活動への参加者が減る傾向にあり、役員選任（特に会長）に苦労している町内もある。そのためもあって、老人クラブを解散した町内もある。

成　人　式　大人になることを自覚し、自ら生き抜こうとする青年を祝いはげます日として、昭和23年（1948）に制定されたのが「成人の日」（制定時は1月15日であったのが、平成12年より1月の第2月曜日となる）である。

平成18年の牟呂校区成人式は、例年実施されている牟呂小学校の体育館が耐震補強工事中のため、何年かぶりに牟呂中学校の体育館で挙行された（主催：校区社会教育委員会）。

美しく着飾った和服姿、羽織袴やスーツで正装した新成人たちが、にこやかに受付を通り、成人式のしおり、記念品（フォトフレームとクッキー）、小中学生の代表からのメッセージが手渡される。

式は、国歌斉唱・豊橋市民愛市憲章唱和で始まり、主催者あいさつ、来賓祝辞、恩師祝辞と厳かに進行する。恩師祝辞の中では、新成人たちの小中学校時代のエピソードがユーモアを交えて披露され、ひとときのあたたかな雰囲気が醸し出される。続いて社会教育委員長から各町内の代表一人ひとりに記念品が手渡され、それを受けて、新成人の「誓いの言葉」「交通安全宣言」「お礼の言葉」が述べられ閉式となる。 閉式後、記念写真撮影をし、すべての日程を終了する。

平成17年度成人式（平成18年１月８日）

(6) 町内会活動

現在、牟呂校区には坂津・外神・公文・大西・中村・市場・三郷の7町内会がある。三郷は明治時代に神野新田干拓によって出来た牟呂では比較的新しい地域であるが、三郷以外の町内は、江戸時代の牟呂村より続く小村がその起源である。

これらの町内は、町内会長（町総代）、副総代、会計（町内会長以外を立会（たちあい）と呼ぶ）の各種役員や組長を選出し町内活動を運営すると共に、校区や行政関係役員の選出も行い、幅広い活動を行っている。これらの町内会は同じ牟呂の中にあっても運営方法や役員数などは異なっており、位置や歴史的環境などによってその気質にも微妙な違いを持っている。 各町内会の特徴は後述するとして、下記の表とグラフにより昭和35年(1960)以降の町内会ごとの戸数と人口を指標に、校区の移り変わりを見る。

人口を昭和35年と平成12年(2000)で比較してみると、昭和40年代はわずかな増加であるが、60年代以降増加し7,568人から11,904人と約1.5倍に増えている。これは昭和54年(1979)から施行された「牟呂地区区画整理事業」(平成17年度完了)により宅地が大量に供給され、住宅やアパートが数多く建てられたことによるものである。世帯数も一貫して増加しているが、やはり区画整理事業の進捗した60年代以降大きな増加を示しており、純粋な農村地域であった牟呂校区が大きな人口を抱える住宅地域へと変貌したことが分かる。

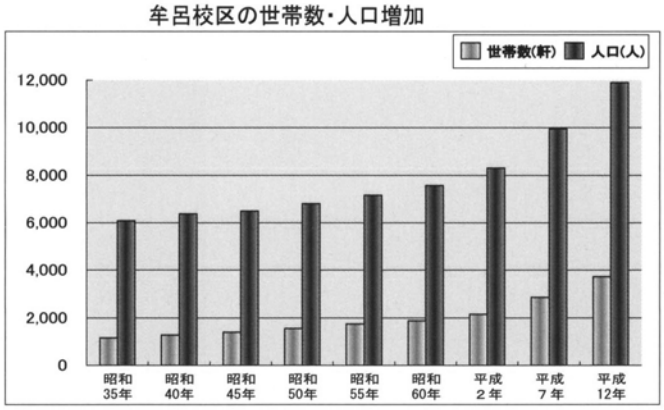
しかし、こうした人口の増加は地域共同体としての町内会に、加入者の減少という新たな問題をもたらしている。昭和55年に89%であった町内会加入率は、平成12年には55%まで低下しており、今後地域の諸活動や防災活動をより確実に進めるには、未加入者の町内会への加入が大きな課題となっている。

牟呂校区町内会別世帯数及び人口（町内会への加入・非加入を問わない、国勢調査に基づく数値）

町内＼年	昭和35年		昭和40年		昭和45年		昭和50年		昭和55年		昭和60年		平成2年		平成7年		平成12年	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
坂津町	86	455	113	561	154	648	188	778	185	713	197	724	202	782	224	798	297	925
外神町	150	711	197	849	219	932	256	1,003	270	1,013	269	1,010	325	1,126	403	1,338	500	1,536
公文町	140	723	159	748	185	791	210	920	220	897	222	883	225	862	284	1,038	338	1,098
中村町	120	598	121	595	130	596	148	629	150	682	147	619	129	560	165	661	202	716
大西町	130	705	134	745	150	731	143	681	159	739	167	764	189	815	241	944	309	1,152
市場町	251	1,294	264	1,315	258	1,235	274	1,193	351	1,316	341	1,236	339	1,148	355	1,158	459	1,365
三郷町	289	1,601	294	1,561	303	1,558	332	1,602	397	1,800	528	2,332	731	3,012	1,188	4,021	1,633	5,112
計	1,166	6,087	1,282	6,374	1,399	6,491	1,551	6,806	1,732	7,160	1,871	7,568	2,140	8,305	2,860	9,958	3,738	11,904

※平成２年、汐田校区が新設されたが、この表では、汐田校区となった町内は記載していない。　　※「豊橋市の人口」より

牟呂校区の世帯数・人口増加



牟呂校区町内会加入戸数と町内会加入率

町内＼年	昭和55年			平成12年		
	組数	加入戸数	加入率	組数	加入戸数	加入率
坂津町	9	162	88%	10	205	69%
外神町	12	257	95%	19	348	70%
公文町	13	187	85%	16	222	66%
中村町	10	146	97%	12	156	77%
大西町	12	148	93%	16	230	74%
市場町	17	276	79%	17	242	53%
三郷町	21	358	90%	37	651	40%
計(平均)	94	1,534	89%	127	2,054	55%

坂　津　歴史・文化・ふれあいのまち

坂津は、牟呂各町に遅れること20年にして土地区画整理事業が始まった。市施行で91億円の予算を計上し、内田地区を含め21haの規模で、平成27年の完成を目指し、工事を進めている。まちづくりテーマに沿って、計画が実施に移されている。

このまちづくりテーマを支えているのが緑の自然環境であり、安心・安全を基盤とした社会（生活）環境である。

（いま）坂津の竹薮から埋蔵文化財が

坂津のまちを守ってきた台地末端の竹薮が切り取られて埋蔵文化財が姿を現してきた。いよいよ坂津にも、区画整理事業の動きが見えてきた。往古の志香須賀の渡し跡も見えてくるだろうか。

台地の末端（標高10.6m）

（歴史）大切に残したいもの

まちづくりテーマの第一は歴史である。志香須賀の渡しを上がると坂津寺、三ツ山古墳を過ぎると往還へ、若宮貝塚や境松遺跡から

三ツ山古墳の発掘

当時の生活を史実として偲ぶことができる。

明治には牟呂吉田村の役場が置かれ、村民の憩いの場所が、三ツ山古墳跡の広場であった。そこで運動会や相撲大会が開催された。古墳には牟呂吉田村の忠魂碑等が建てられ、日清・日露戦争での戦死者の氏名も刻まれている。

三ツ山古墳と忠魂碑

（文化）大切に育て伝えたいもの

西福山坂津寺は渡しの安全を祈願して建立された寺で、古来より観音信仰の厚い霊場として、坂津の人々がお護りをしてきた。

坂津寺と再建時に立てられた霊場の碑

（ふれあい）大切に守りたいもの

安心と安全のまち坂津は、自警団の奉仕活動に依存しながら、町内の自治活動を柱に防

安心・安全な町坂津　防犯隊の発足式

火・防犯・防災の自治組織を編成した。次世代のためのまちづくりをはかっている。

外　神　連帯し活動する町内会を目指して

区画整理事業完了後、地名変更があり牟呂用水路を境として東側を牟呂外神町、西側を牟呂水神町と呼ぶことになった。外神町内会はこの２町と字八王子等で構成されている。

町内会に属する戸数は、平成17年（2005）現在で350戸、人口は1,240人である。

町内会の目的は、外神町内会規約に記載されており、「町民の連帯意識の向上と相互扶助のために組織し、町内の自治活動や校区自治活動、市との委託契約による義務を行うこと」となっている。現在の組数は20組である。

戦後から区画整理事業終了までの町内会活動は、現在と大きな違いはない。しかし、以前は町費の徴収といっても、固定資産税や水道代、他に給食費の徴収も行っており各世帯の徴収額が違っていたので大変であった。また、伝染病予防のために町内一斉清掃活動なども行っていた。

当時は、自警団活動も盛んであり、団員も80～100名ほどで、参加者も多かった。消防ポンプの整備・点検、夜警、祭礼の幟立て・櫓建て等現在も行っている仕事の他に、町内に５か所あった防火用水の清掃、敬老会の余興も行っていたようだ。

江戸時代から外神は坂津や公文と中牟呂村として深い繋がりがあった。御遷宮には写真のように外神公民館から公文と坂津の神社まで飾り立てたお車で練り歩いた。

奉納餅引き行事（昭和61年９月・公文熊太郎神社御遷宮時）

区画整理によって、道路は整備され、公園や街路灯も設置されてきた。過去の町内活動の良さを生かし、さらに安全で、かつ安心して過ごすことのできる町内にするために、町内の一人ひとりがあいさつをしたり声を掛け合ったり、各種行事に積極的に参加し、連帯意識を強めていく必要がある。

町民の憩いの行事の一つである「納涼夏祭り」は、平成７年（1995）から始まったもので、町内役員、組長、自警団、子供会が参加し、外神公園に櫓を建て、提灯を飾り、かき氷やだんご、ゲームコーナーなどの屋台を出し、大人も子供も楽しく踊り回る。

納涼夏祭りの様子（平成17年８月）

町内の行事だけでなく、子供会の球技大会、自警団の放水大会、校区体育祭など町内の威信をかけた大会にも進んで参加している。

町民の生活や安全を守る取り組みにも積極的で、530運動もその一例である。

外神公園での清掃活動（平成17年６月）

公　文　先人の意志を見直し連帯の絆を

平成17年度の町内加入戸数は232戸、933人で、組数は16組である。昭和39年度からの統計によるとわずかながら戸数は増加しているものの、その伸びは他の町内と比べてゆるやかである。

現在、公民館の玄関脇に高さ0.83ｍ、幅1.46ｍの御影石に「殻山開墾」の文字が刻まれた碑が建っている。

殻山開墾記念碑（公文公民館前）

この碑は、公文の町民が明治時代の終わり頃から殻山の開墾を始め、10年余の歳月をかけ、大正10年(1921)に農地として完成させたことを記念して建てたものである。開墾してできた水田を町内の財産とした。水田から収穫した米を村のお祭りやお日待ちに利用した。

見事復活した榎の大樹（平成18年５月）

区画整理が完了したが、公文の町内の中で移動しなかったものがある。公文公園に生えている榎の大樹である。

榎の大樹は高さ約14ｍ、幹周り４ｍもある。昭和20年６月20日の空襲により火の手があがった。ようやくのことで消し止めたが、その後、不死鳥のごとく生き返り、今のように葉を生い茂らせるまでになった。今だに幹にはその時の焼け跡をとどめている。

この榎の木ではないが、牟呂村由来記に「虚ろ船に乗っていた開元親王が、大海津の浜に打ち上げられた。村民が介抱し、仮小屋としたのが榎の古木の下であった。」と記されている。榎の木の下に立つとはるか奈良時代に誘(いざな)われる思いがする。

開墾に参加した43人衆（大正10年）

大　西　先人の努力を生かし町内の活性化を

平成17年度の町内会加入戸数は258戸、人口1,173人、組数は16組である。

昭和初期の大西町は、牟呂用水路の東側に沿って北から真裏口、大海津、大西、作神、東明治の字からなっており、その戸数は約90余戸で、ほとんどの家が農業と漁業（海苔とアサリ）で生計を立て、共同活動の盛んな集落だった。

開墾の碑（大西公民館敷地内）

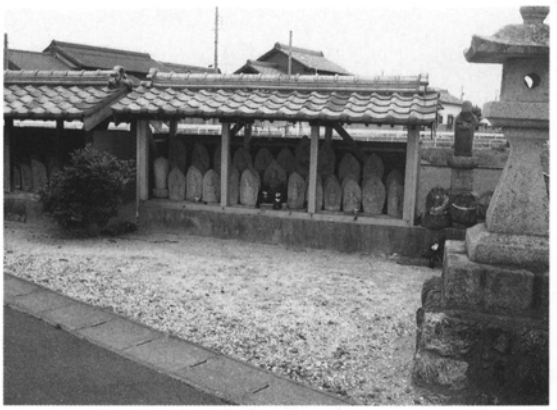
その具体例をあげると次のような事がある。まず、大正２年（1913）には、当時の青年会が荒地を開墾し、爾来70年間青年団活動の一環として米、麦を栽培し、敬老会や自警団活動の費用に充当していた。

ところが、昭和54年の牟呂土地区画整理事業によりその土地も宅地化されたため、水田は消滅した。しかし、先人たちの努力のお陰で、公民館、観音堂、倉庫等を建設することができた。

かつては養蚕も盛んで、昭和18年頃までは共同蚕糸場(孵化)を作りコストダウンを図ったり、終戦直後の食糧難の時には、「さとのき」（砂糖キビ）の汁を煮詰めて黒砂糖を製造して販売した。さらに、大西製麺工場を建設し、小麦と交換、直接販売をして近隣の人々や市内の方々から喜ばれた。

昭和30年代になると葬具を購入して町内のみならず校区外にも貸し出し、重宝されたものである。

時は流れ、日本は高度経済成長とともに物は溢れ、価値観が変わり大西町の共同活動は衰退して、今はそのことを知る人も少なくなった。



三十三観音や常夜灯

昭和54年から始まった区画整理事業は森や林を消滅させ、都市型街並みを形成し、大変便利になってきた。そこに住む人々の混在化や多様化が進展し、（平成17年現在の居住世帯数約300戸）農村文化も伝統行事も姿を消しつつある。

「時代の変化」の一言で片付けられるのは淋しいが、今を生きる人達が新しい環境の中で新しい価値観をもって素晴らしい地域社会を築いてくれる事を信じている。

整然と並ぶ町並み（南から天王社を望む）

中　村　町内会組織と年中行事

牟呂中村町は、その名の通り市場町、神野新田町、大西町、公文町等に囲まれた位置にある。町の中ほどを大通りが走り、その東部分に牟呂小学校、普仙寺、明照保育園、牟呂郵便局、西部分に公民館、作神社、作神公園を擁する。

町内会に属する戸数は159戸。しかし、町内会に所属していない家庭もあるので、加入を勧めているところである。

町内会の組織としては、町総代（1）、立会（2）、組長（12）、氏子総代（2）、作神社社守（1）、民生委員（1）が町内会の運営にあたり、各種団体として更生保護女性会、自警団、消防団、老友会、中友会（自警団を退団し老友会に加入するまでの任意団体）、小中学校PTA役員、体育委員等が運営をバックアップしている。

主な行事としては､次のようなものがある。

4月の第一土･日曜日に作神社の祭礼を行う。日曜日の本祭りには、神事の他、子供会の御神輿による町内の練り歩き、公民館での自警団による出店、中友会によるビンゴ大会およびバザー（みたらし団子、花見団子、大福餅販売）、そして午後4時には餅投げが盛大に行われ、祭礼が終了する。

作神社祭礼

8月には、公民館で子供会のキャンプが実施される。昼間のうちはゲームその他を楽しみ、夜は高学年だけ宿泊し交流を深める。

子供会キャンプ

12月初旬には、村の秋葉山の祭礼を実施し、町内に火災が起きないようにお祈りする。 大晦日には迎年準備を実施し、夜半から元日まで焚き火をしながら参拝者を迎え、御神酒と甘酒を振る舞う。

元日の朝には年頭祭を実施する。ここには村の各種団体長が参列し、町内の人たちの一年間の無病息災を祈願する。

作神社年頭祭

2月初旬には総会を開き、一年間の事業報告、決算報告を承認してもらい、次年度の役員を選出する。

各種団体の主だった活動として、老友会は作神公園・作神社周辺の清掃や除草、植樹等の維持管理を受けもっている。自警団は、毎月、町所有の消防ポンプの点検と町民の防災意識啓発のための町内巡視をしている。さらに、年に一、二回子供会と一緒に町内の消火栓や街頭消火器の見廻りをし、将来の自警団員を育成している。

市　場　牟呂市場町のいま昔

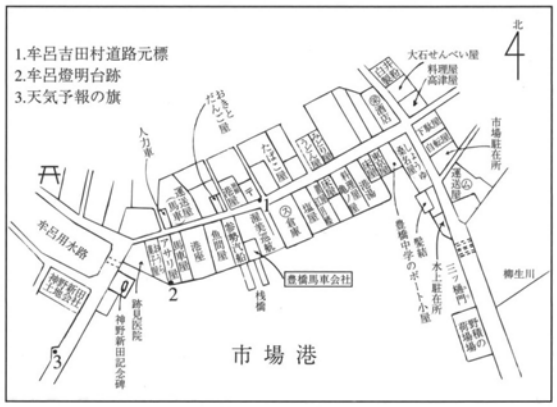
牟呂市場町（以後市場）は、昔から自然環境とともに、社会環境面にも恵まれていた。市場では、物の取引が盛んに行なわれ、人々が集まる交通の要衝でもあり、物の集散地でもあった。市場は、海とともに発展し、田原や福江はもとより、伊勢地方とも人や物の往来があり、いわば、牟呂のみならず、豊橋の海の玄関口でもあった。

市場の港付近には、４～５軒の料亭があり芸者衆も17～8人いて、太鼓や三味線で夜更けまでドンチャンドンチャンで賑わったという。

幻の計画となったが、豊橋・牟呂間軌道施設申請書が、明治33年（1900）に政府へ提出されている。明治35年（1902）には、30人位乗れる渥美巡航船（石油発動汽船）が田原や福江・伊勢へ運行を開始した。陸路では、馬車や人力車が豊橋市街地を結び、市場は牟呂の繁華街でもあった。

このような華やかな面とは別に、市場の大方の町民の生活は、農業や養蚕、漁業にと、多様な生活形態であった。市場は、他の町内と比較すると、平均的に、田畑の耕作面積が少なく小作農が多く、海面に依存する世帯が多かった。

農業や漁業で、機械化の進んでいなかった



大正末期頃の市場の通り

当時は、子どもたちも、家の貴重な働き手だった。田植えや田の草取りはもとより、収穫期には家族総動員となり、学校も農繁休暇となった。海苔をたこに掛けたり採ってきたアサリを街まで引き売りに行ったり、剥き身にする手伝いなどは日常茶飯事だった。大人も子どもも、とにかくよく働いた。

家庭風呂の少なかった当時にあって、昭和21年(1946)にできた共同湯は、町内の情報機関の役割も果たし、人々のコミュニケーションの場であった。今、漁業補償に始まり町の一大事業となった区画整理、さらに市街地化の波は、人々の生活やものの考え方、さらに村落構造・村落共同体を大きく変えた。時の流れとはいえ、一抹の淋しさを覚える。

市場公会堂を背景に全員集合写真（平成17年８月）

三　郷　神野新田誕生そして豊橋の表玄関へ

明治29年（1896）４月15日神野新田が誕生した。毛利祥久（よしひさ）築造の毛利新田が大暴風雨で崩壊後、神野金之助により事業が引き継がれ、総面積1,100余町歩の神野新田が完成した。

神野新田紀徳之碑

築造に成功した理由は、神野、富田両家の総力をあげての努力と服部長七が考案した長七たたき（人造石）の威力、その他諸々の幸運にも恵まれたことなどが考えられる。しかし、その後の農民の生活は非常に苦しいものであった。

干拓後12～13年間の、米の収穫量は、反当り1.5俵（約90kg）位で年貢も納められない極貧状況の日々であった。土地を肥やすために、軍隊から馬糞をわけてもらったり、町場から人糞を運んできたり、川藻や海藻を田畑に鋤きこんだりした。また、夜は夜で縄や藁（わら）草履を編み、夜なべ仕事をした。

精神的な安らぎを得るために明治28年（1895）には牟呂神富神明社、同37年には圓龍寺を建立した。また、明治29年には住民子弟教育のため神野尋常小学校を設立したが同35年には牟呂尋常高等小学校と合併した。さらに、明治41年には治安維持を図るため三郷駐在所も置かれた。

米の収穫量が増え、生活が安定しだしたのは大正の末期頃からである。

昭和21年（1946）２月、神野三郎は小作農民に対し、「農地改革」に先駆け、農地を開放した。

以後、先人達の献身的な努力により、現在のような新田が完成した。

その後、地元に住む河合陸郎市長により、政治生命をかけた港づくりが計画された。昭和35年（1960）からは本格的な港づくりへと発展した。

豊橋港は今や日本の重要港湾へと躍進し、さらに特定重要港湾への足掛かりを確立するとともに、豊橋の表玄関となり、日本経済の中心的存在としての地位を確立しつつある。

発展する豊橋港

豊橋港線が開通してからの三郷は、工場や会社、住宅が林立し、人口が急増している。

町内は、北･中･南に区分され、平成17年度の町内加入戸数は582戸で、組数は37組である。三郷で生まれ育った金子堅太郎さんにこの土地に住む皆さんへの願いを語ってもらった。

> 思えば私達は、昭和の初期に生まれ神野新田の発展と共に生き、今、孫達に新田の行く末を託す身である。まさに良き時代を経験した一人として末永い新田の発展を願うものである。
> 「子々孫々克（よ）く念（おも）ひ篤（あつ）く信じて父祖の艱難辛苦（かんなんしんく）を忘れる勿（なか）れ。」明治維新に勲功のあった品川弥二郎翁のお言葉である。決して忘れることのないよう、先人の苦難を後進に伝えて行きたい。

第3章　教育と文化

1　学校教育と保育

牟呂校区には、公的教育機関として、幼稚園１、保育園２と小・中学校がある。他に小学生の放課後の特別保護施設として、学童保育が２か所設けられている。

校区の教育力として今問われているのは、校区としての、安心・安全の問題であろう。

児童生徒見守り隊の巡回

子どもたちの健全な生活を守る環境の整備と校区民に信頼される組織づくりである。学校教育が、地域の安全対策なくして考えられなくなったからだ。校区総代会を中心とした子どもたちを守る組織として健全育成会がある。

登下校時の事故防止防犯見守り隊が、総代会が中心となり老人会を核として組織された。

(1) 保育園・幼稚園

明照保育園

(歴史)

昭和28年の開設以来、地域に根ざす「子育てセンター」として、常に人と人との出会い、知り合い、認め合い、伝え合い、助け合いを基本に、日本の文化と伝統の行事を多く取り入れ、地域小学校との交流を含めて、地域・家庭・園の温かい交流の中で園児の健やかな成長を願って運営を続けている。平成16年３月に、創立50周年記念祝賀行事を、多くの卒園児を招待して開催した。

(教育方針)

物的環境・人的環境を整え、子どもの生活の中から“自主・協調”の精神の芽生えを期し発達年齢に応じた課題教育が専門的に繰り広げられ、それらが自然に子どもたちの身につくような人格形成を心がける。

(ふれあい)

常に子どもと接する保護者の言動によって、子ども自らが愛されている、守られている、認められているという気持ちが生まれ、その中からよりよい心情・意欲・態度が育ち、感謝の念が芽生えるような保育を心がける。

(これからに夢を描いて)

○地域に広げる子育ての輪づくり

子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人のつながりによる安らぎの場になるように、園の運営に心がける。

○学童保育（児童クラブ）

小学校低学年児童にとって、放課後の望ましい生活の場を提供し、保護者の留守の間の安心・安定の場を作る。卒園者の心の変容に気づくように心がける。

明照保育園の全景

三郷保育園

（教育目標）

心身ともに、たくましく、よく遊ぶ子ども

・健康で安全な生活に必要な習慣や態度を身につける
・何事も積極的に取り組み最後まで頑張る子
・自然を愛し、互いにいたわり合う子
・自主的に友達と協力して遊べる子
・いろいろな方法で表現活動を行い、楽しく創意工夫をする

三郷保育園の全景

（大切に育ててきたもの）

・創作ダンス　表現する楽しさ
・一輪車　できなかったことができるようになる楽しさ
・プール遊び　全力をあげて活動する楽しさ
・米作り、芋掘り、野菜作り　みんなで食べる楽しさ

（たのしいふれあい）

・三郷フェスティバル　家族の人とのふれあい
・お泊り会　友だちや保育士とのふれあい
・世代交流会　老人会とのふれあい
・もちつき会　地域の人とのふれあい
・子育て支援　子育て支援の親子とのふれあい

子育て支援行事（もちつき会）

豊橋若葉幼稚園

（歴史）

・昭和24年４月　若葉保育園として開園
・昭和32年２月　豊橋若葉幼稚園に変更
・平成２年４月　現在地に新築移転
・平成13年３月　増築・園舎完成
・平成17年３月　修了児　延4,666名

若葉幼稚園の全景

（園の方針）

ーすこやかで心の豊かな子ー　子どもたちの年齢に応じて、さまざまな体験を通じ豊かな感性を育て、創造性をはぐくみ、一人ひとりの可能性を伸ばす。つよく、かしこく、心の豊かな子の育成を目指す。

（教育目標）

・たくましい健康の保持増進
・正しい躾ときまりを守る
・人間性豊かな思いやりの心を育てる
・遊びを通じて思考力、創造力を養う
・自主、自立、進んで行動する

子ども中心に考えて、園と家庭で連携しながら、その時々で子どもにとってより良い方向に。少年犯罪、いじめ等の防止につながる人間性を幼児期で教育。

若葉が誇るマーチングバンド

(2) 牟呂小学校

牟呂小学校のあゆみ

明治６年	第10中学区第11番小学牟呂学校
明治９年	第10中学区第31･32番小学校牟呂学校
明治13年	渥美郡第７番小学牟呂学校
明治17年	渥美郡第８学区小学牟呂学校
明治20年	渥美郡尋常小学牟呂学校
明治25年	渥美郡牟呂村立牟呂尋常小学校
明治26年	渥美郡牟呂村立牟呂尋常高等小学校
明治40年	渥美郡牟呂尋常高等小学校
昭和16年	豊橋市牟呂国民学校
昭和22年	豊橋市立牟呂小学校
平成２年	豊橋市立牟呂小学校（汐田小学校と分離）

教育目標

校訓　よく学び、よく遊ぶ

ー校訓を合言葉に、「知・徳・体」のバランスのとれた子どもを育成するー

めざす子どもの姿

・自ら進んで学習し、深く考える子
・相手を思いやる、心の豊かな子
・健康で明るく、たくましい子

子どもたちの姿

○総合的な学習・生活科

具体的な活動や体験を通して、自分、社会、自然との関わりや問題解決する力を育てる。

校内での田植えの様子

○本の森

中校舎（平成16年度増築）に新しくできた図書館「本の森」では、みんな楽しく思い思いに物語の世界に浸っている。

図書室での読書

○運動会

5月、さわやかな風のもと、牟呂っ子が全力を出して競技をする。保護者をはじめ多くの地域の人たちが声援してくれる。

運動会の様子

夢のある牟呂小学校へ～６年生の作文より～

牟呂小学校はあいさつのあふれる素敵な学校です。そんな良さを地域の人達にも広げ、地域の人達とふれあう機会がもっと増えればいいと思います。

今の牟呂は、道路も整備されにぎやかな住みよい町です。でも、何十年か前までは、町の様子や人々の生活も全然違ったそうです。私は、その頃の様子や、牟呂がどのように変わってきたのかを、地域を支えてきてくれたお年寄りに聞いてみたいです。そして、みんなで手を取り合い、これからのことを考えていけば、夢にあふれる素敵な牟呂小学校になっていくと思います。

(3) 牟呂中学校

牟呂中学校のあゆみ

昭和22年	西部第二中学校として牟呂小学校北校舎に開校　生徒数345名 職員14名
昭和23年	牟呂中学校と改称 現在地（国立水産試験場跡）に移転
昭和24年	木造12教室竣工　校章制定
昭和25年	校歌制定（丸山　薫　作詞）
昭和28年	13号台風で堤防決壊・浸水
昭和39年	東京オリンピック記念碑完成
昭和41年	鉄筋校舎西側部分完成
昭和43年	鉄筋校舎中央部分完成
昭和44年	鉄筋校舎中央階段部分完成
昭和45年	体育館完成
昭和47年	鉄筋校舎東側（職員室側）完成
昭和48年	プール完成　土俵完成
昭和49年	旧正門完成　調理場用地譲渡
昭和50年	牟呂用水清流化運動開始
昭和58年	斜面走路完成　本館東側増築
昭和59年	体育館ステージ増築
平成元年	運動場南側拡張工事完了
平成３年	新館・部室完成　『大志』制定
平成７年	創立50周年記念に正門改修
平成８年	創立50周年 院内学級（市民病院）開設
平成11年	図書室・美術室完成
平成17年	生徒数729名　職員51名

校　　訓　『大　志』 Be Ambitious

教育目標　・深く考え　自ら学ぶ生徒
・礼儀正しく　心豊かな生徒
・実践力のある　たくましい生徒

伝統の生きている学校

詩人の丸山薫さんが校歌を作詞した当時、校舎の屋上からは、松林や三河湾に浮かぶ船が見えたそうだ。牟呂中学校の学校日誌を振り返ると、今はない行事をたくさん見つけることができる。

例えば田植えと稲刈りのための農繁休暇、生徒会イナゴ捕り、線路西芸能祭、PTAあさり作業、PTA海苔作業、田の草取り学習、学校田田植え、お田植え祭、漁業青少年研修会、海水浴（吉前海岸）などで、牟呂中が田舎の学校であったことがうかがえる。現在でも素朴なよさが、生徒のあちこちに見受けられる。昼放課には元気よく運動場に走り出て元気よく遊ぶ素朴な子どもらしい姿が見られるのも、牟呂中の特徴である。

牟呂中学校の正門と校舎

また、赤十字、赤い羽根、緑の羽根などの街頭募金活動も長年継続されてきた。今でもボランティア委員会がその精神を引き継いでいる。体育面の学校行事では校内10㎞ マラソンや耐寒マラソンなどが実施されていた時代もあり、スポーツに力を入れて心身の健康づくりを進めてきた。部活動では輝かしい成果が並び、今でも部活動は牟呂中の伝統となっている。

地域と共に人づくり

牟呂中周辺には豊かな自然がまだたくさん残っている。また、ライフポートや総合体育館などの公共施設も多く、学校教育に活用が可能である。今後、港の施設も一層多様化し、新たな学びの場とすることも可能になる。このような物的環境に加え、地域に根ざした各種団体の強力な人的サポート体制が充実していることも牟呂中の特徴である。現在は「あいさつの牟呂中」を合い言葉に、心豊かな生徒の育成を目指している。

2　史跡と民話・昔話

区画整理後、牟呂校区には重要な遺跡が多くあることが分かった。発掘調査後は、移築されたり、埋め戻されたり、記録保存後壊されたりしている。現在保存されている遺跡は、三ツ山古墳、市杵島神社古墳、牟呂城址、水力発電所樋門跡、神野新田紀徳之碑等である。

(1) 牟呂城（鵜殿兵庫之城）址

旧住所でいう牟呂町字公文88番地は白井茂司さん宅で、牟呂城址の中に位置していたことになる。白井さんに城址について伺うことができた。以下は、そのあらましである。

> 昭和60年（1985）頃までは私の家も東の畑も藪に囲まれていた。こんもりと盛り上がった土塁が残っていたよ。子供の頃はこの近辺で遊んだものだ。
>
> この土塁を断ち切って東西に道路が走っていた。この道路が旧農協倉庫の所で下がっていた。この斜面にハマグリばかりの貝塚があった。きっと、その東側は海だったに違いないと思った。垣根を動かしているとき幅１ｍほど軟らかい黒土の場所があった。それが、城を囲む堀だったんだよね。

歴史的な事柄については、14頁を参照されたい。取りもなおさず、戦国時代に牟呂周辺を治めていた豪族の館があったことは間違いない。その鵜殿氏は熊野川の河口にある鵜殿村がその出身地で、鎌倉時代には、蒲郡地域に移り住み、戦国時代には大きな勢力を備えていたようである。

(2) 民話・昔話

牟呂校区に伝わる民話や昔話は、合わせて5つ収集することができた。

正直であれと諭す馬頭観音　大西の地蔵堂の脇の祠に鎮座している馬頭観音にまつわる民話だ。故小柳津佐七さんが、昭和59年（1984）に『しかすが』の紙面に紹介されたものである。

> むかし、むかし、大西の里にとても働き者の馬方が住んでいた。この馬方は馬の背中に荷物を載せて運ぶことを生業にしていた。
>
> ある時、いつものように馬の背に荷物を載せて山の村まで運んでいった。ところが、帰りが遅くなってしまい山の中で日は西に傾き始めた。つるべ落としの秋の日は暮れが早い、馬方は、山の一本道を里に向かって急いだ。
>
> 里のともしびを見て、少し落ち着いて立ち止まってみると、どうも自分と馬だけではない何かがいることに気付いた。前になったり、後になったり、姿は見せないが、わずかな風がにおいを運んでくる。
>
> 狼だ・・・・。馬方はいつ襲われるか気が気でない。とうとう観念した馬方は、恐さに震えながらも叫んだ。
>
> 「お、おーい。そこの狼よ、姿を見せな。隠れてなくてもいいぞ。わたしの家までついておいで。おまえの大好きな塩をやるぞ。」
>
> ようやく里に出た。やっとの思いで村に着いた。でも、狼は見え隠れして着いてきたようだった。家に着くと馬に餌をやり、自分も飯を食べ、寝てしまった。
>
> 次の朝、うまやには、馬の姿が見当らなかった。井戸には、馬の脚が一本だけ落ちていた。はっと、昨日のことが思い出された。そうだ、（家に着いたら狼の大好きな塩をやる約束をした。）塩をやらなかったばかりに馬を食べたんだ。わたしが馬を殺してしまったんだ。約束を守らなかったために馬が犠牲になったんだ。馬方は嘆き悲しんで、それからまもなく死んでしまった。
>
> 村の人は、馬と馬方を哀れに思って２体の馬頭観音を祀ったそうだ。その馬頭観音が、今、そこに安置されている。

白蛇の池

> かつて外神に裕福な長者様が住んでいた。長者様の屋敷には、池があった。この池は、夏のどんな日照りの時でも、いつも美しい水を満々とたたえていた。そして、田畑にどんなに送っても枯れることはなかった。
>
> ところが、長者の息子が嫁をもらうことになった。息子の館を建てるために池を埋め立て

ようとした。池の水を汲み上げると今まで見たことも無いような白い大きな蛇が出てきた。

その白蛇はどうしても逃げない。しかし、泉を止めると蛇も死んだ。館は建てられたが、まもなく長者の屋敷は没落した。

牟呂八幡さまの鐘

牟呂に一人の漁師がいた。その漁師は船から釣り糸をたれていた。磯辺のあたりにカラスがたくさんいた。近付いてみるとカラスの鳴き声が聞こえてきた。さらに近寄ってみると「ムロハチマン、ムロハチマン」と鳴いていた。岸に上がってみるとそこに小さなつり鐘があった。そのつり鐘を牟呂八幡様へ運び込み、安置した。

次の朝、漁師が牟呂八幡へ行ってみると境内に満々と水をたたえた池がありその中に龍が泳いでいた。しばらく、龍は池に住みついていた。しかし、ある時釣り鐘売りが来て牟呂八幡宮の鐘としては小さいのでもっと大きな鐘と換えてあげるといって持っていってしまった。それ以後、池も消え龍の姿も見られなくなってしまった。

海に消えた皇子　まだ、宗住寺や真福寺の西が海であった頃の話である。『牟呂村由来記』を書き下した物語である。

ある時、大海津の海岸にうつろ舟が漂着した。舟には殿上人と思われる若い男女と年のいった女が一人、屈強な武士二人の、五人が乗っていた。村人は、手厚く介抱した。元気を取り戻すと、ここに流れついたわけを村人に告げた。話を聞いた村人は、村長に申し出て大海津の南にあるひがき屋敷に新しい御殿を建て、皇子の住まいとした。

皇子も大変に喜ばれて、御殿の裏に観音さまを祀り、深く信仰された。この観音さまは、御殿の真後ろにあるということで真裏口の観音と呼ばれ、多くの人の信仰を集めた。遠くから大勢の人が訪れ、市(いち)が立つほどとなった。多くの人が観音さまにお参りをするようになったことや皇子が、近国の神主に官職を許可したことが、国府の役人の知ることとなった。

役人は、天皇の皇子であることに驚き、都にそのことを報告した。天皇は開元王の振る舞いを知り、怒って追っ手を差し向けた。皇子は見苦しい死に方はしたくないと自分の死を覚悟し、村長にこれまでの礼を言うと、自ら海にはいり、波の間に隠れてしまった。

恋　路　中西三知雄氏が『牟呂史つれづれ』で「恋路」として紹介した悲恋物語である。

むかし、牟呂に住んでいた娘が、前芝に住む男を好ましく想うようになった。二人は夜毎逢う瀬を楽しむようになった。しかし、ほどなくすると男は、娘が通ってくることを疎ましく想うようになってきた。それでも、娘は毎夜通ってきた。男は、娘が通ってくる目印の燈明台の明かりを消しておいた。それとは知らないで娘はいつもの通り海に入り泳ぎ始めた。ところが、どうしたことか燈明台の明かりが見えない。

次の朝、前芝の浜辺に冷たくなった娘の亡骸が打ち上げられていた。その三日目の朝方、前芝の男の亡骸(なきがら)が牟呂の浜辺に打ち上げられていた。

(3) 牟呂音頭

民話や昔話ではないが、牟呂には校区の自然や生活の様子を歌った「牟呂音頭」がある。かつての牟呂校区の産業や生活の様子が偲ばれる。　作詞：小林増雄　作曲：鈴木　満

1　牟呂は牟呂は　よいとこ住みよい郷よ
　春は浜辺で　あさりがわけば
　早くおいでと　そよ風つげる
　明るいひとみ　いそしむ雄の子
　あさり本場の牟呂の浜　よさ牟呂の浜

2　牟呂は牟呂は　よいとこ住みよい郷よ
　夏は広田で　菜の花　みのる
　早くおいでと　ひばりがつげる
　明るいひとみ　いそしむ乙女
　菜種本場の牟呂の丘　よさ牟呂の丘

3　牟呂は牟呂は　よいとこ住みよい郷よ
　秋は豊年　いなほの波よ
　早くおいでと　尾花がつげる
　明るいひとみ　いそしむ乙女
　米の本場の牟呂の丘　よさ牟呂の丘

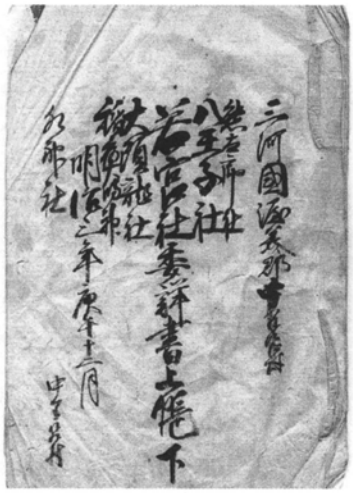
4　牟呂は牟呂は　よいとこ住みよい郷よ
　冬は海苔とき　みな黒々と
　早くおいでと　かもめがつげる
　明るいひとみ　いそしむ雄の子
　海苔の本場の牟呂の浜　よさ牟呂の浜

5　牟呂はほんに　よいとこ上代のめぐみ
　四季を通じて　うなぎもとれる
　召しちゃいかがと　初牛つげる
　努め喜ぶ　栄えゆく郷よ
　うなぎ本場の牟呂の池　よさ牟呂の池

3　信仰と風俗

(1) 牟呂の神社

牟呂には牟呂八幡宮と末社の天王社をはじめとして８社の産土神（うぶすながみ）が祀られている。牟呂全体の神社として崇められているのは、八幡宮と天王社である。



中牟呂村の神社記録

明治３年の中牟呂村の記録によると、中牟呂村には６社が祀られていたことが分かる。上・下牟呂村にも数社の神社が祀られていた。

各小村には、水利をつかさどる水神が、水の湧き出る辺りに水神様として祀られてきた。牟呂水神町の水神様は、耕地整理事業に係わって、昭和33年４月に牟呂八幡宮に遷座された。

詳しくは牟呂史に譲るとして、ここでは祭礼を中心に、八幡宮の神事相撲と水神社の祭事経費について触れることにする。

(2) 牟呂八幡宮の祭礼「神事相撲」

校区の総代会が主催する牟呂の祭礼は、春の八幡宮と秋の天王社の二社である。各総代は祭礼神事の役割を担っている。八幡宮の祭礼は奉納剣道大会や芸能大会と賑々しく行われ、神幸祭の神事へと盛り上がっていく。

神幸祭の行列は天狗が先導し、稚児や巫女の神楽が奉納される。

神事相撲は、国譲りの出雲神話による諏訪大社の神事相撲に由来する。４名の総代がお役に就く。牟呂八幡宮の神事相撲は力比べではなく、厳粛な占い神事として行われてきた。

神幸祭のお渡り神事（平成18年）

八幡宮の神事相撲は、神輿渡御の際、行列に行事役２人と力士２人が、白い浄衣を着用して随行し、大鳥居下と御旅所で相撲をとる。行事役の１人が６尺棒を持って中央に立ち、北東の方向に棒を差し出し、もう１人の行事役が棒の先に榊の葉を置く。同様に南西、西北、東南と榊の葉を置いて、四角い土俵を作る。軍配の代わりに榊の枝を持った行司と、干地（東）と福地（西）代表力士が東西から土俵に上がり、相撲が始められる。

勝負の結果で、干地・福地の豊凶を占い、西側が勝てば雨が少なくて福地が豊作、干地が勝てば雨が多い年になると占われ、作付けの参考にされてきた。今日では２回闘い、１勝１敗で勝負を終わっている。

相撲の勝敗で吉凶や豊凶を占う（平成18年）

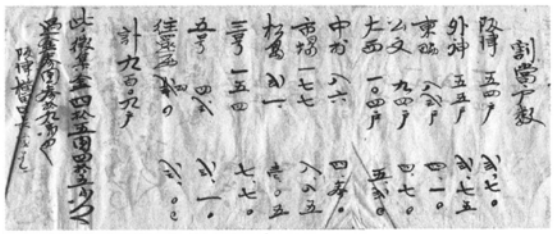
神幸祭が終わると、待ちに待った餅投げとなり、鳥居外の露店も店仕舞いとなる。

(3) 水神社信仰と祭礼

水の神「水神」は、日本全国でほぼ共通して祀られた神さまである。牟呂でも小村ごとに水神様は祀られてきたが、牟呂村中の行事として水神祭が行われたのは、小字名に水神と付いた水神社である。

農家数が全戸数の90%以上を占めた農村地帯の牟呂では、水神様は作付けの神として信心されてきた。日照りで水不足の年には、雨乞い行事を盛んに行ったものである。

昭和３年７月30日に行われた水神祭の入費を記載した雑用帳が残っていた。これによると、祭典用に購入した物や、神官や社守に払った経費、当時の小字の農家戸数などを知ることができる。



購入物品と割当戸数

水神社の祭礼について、杉浦久雄氏は「牟呂の方言」の中で次のように記している。

10月21日　水神社祭礼は全村あげての、年に１度のお祭り騒ぎの日であった。(中略)祭りの日は当村の子供は学校は休みとなり、通学団全員と担当の先生２名も神事に参加した。余興には餅投げは勿論、芝居や映画、青年、子供の相撲等があった。野外の芝居見物では、筵を敷き、鮨を食べながら水羊羹をすすったものである。

各字(あざ)の祭礼の時も、その字は休校となった。漁業協同組合では祭りの字のみ、特にあさりの口開けが行われた。(以下略)

昭和一桁生まれの者は、水神様のお祭りで、乾パンなどのお菓子を貰った記憶があろう。その水神様も、今は八幡宮に遷座されている。

(4) 庚申信仰

年６回の庚申講は、女性禁止であったが、盆と正月が一緒に来たような嬉しい集いの晩でもあった。講仲間を同行と呼び、葬祭時には役割を分担し、力強い協力体制の下に扶助活動を続けてきた。年７回目を御供養といい、特別に祀る。しかし今では、庚申講を解散する組も多くなり、牟呂では坂津・外神の若当と大西の中当だけになった。庚申講の解散に拍車を掛けたのが、区画整理事業による新しいまちづくりによるものである。

おてやま跡の坂津・外神三申(当)の庚申塚

若当のおつとめの順序

1　鐘入り（光明真言・庚申真言）
2　全員が３回干支を唱え、真言を称える。
　①「南無青面金剛童子」
　②「家内寿命息災禮敬頂礼十二塔」
　③「家内寿命息災禮敬頂礼七色の御菓子」
3　大数珠回し（百万遍）
4　仏壇に御詠歌善光寺の３番を三回称える
5　神棚(青面金剛童子の掛軸)にお題目と安楽国を捧げる
6　お神酒を頂く（直会）
7　神棚にお供えの七色の菓子とパンを頂く

若当の庚申講のようす（平成18年）

編集後記

牟呂には平成８年に刊行されました郷土史『牟呂史』があります。そこで、新たに作成する『校区史』の意義とねらいを明確にしました。

1　校区全世帯に配布する建前から校区のことを分かりやすく解説すること。

2　区画整理事業前後の校区の変貌振りを明らかにすること。

3　各町内の紹介をすること。

プロットに基づいて実際に執筆を始めました。『牟呂史』を参考にしましたが、刊行後すでに８年の歳月が経過しているため、資料について再度検討する必要が生まれてきました。そこで、校区や町内の皆様方に協力を依頼し、やっと完成させることが出来ました。これは、ひとえに校区の皆様方のお陰と、総代会ならびに執筆者一同感謝申し上げます。

ねらいを達成しているかどうか心配ですが、手塩にかけて執筆しました。これを読まれた皆様が牟呂に愛着と誇りを持ち、さらによき牟呂になるよう努力されることを願って編集後記とします。

■参考文献

「牟呂史」／「豊橋埋蔵文化財調査報告書」／「平成10･11･12年度三ッ山古墳調査概要」／「豊橋のむかしばなし」／「とよはしの民話」／「とよはしの民話Ⅱ」／「片身のスズキ」／「しかすが」／「牟呂史つれづれ」／「神野三郎伝」／「わすれじの記」／「愛知の地震」／「昭和20年1月13日三河地震の震害と震度分布」／「伊勢湾台風の全容」／「台風十三号災害原因並びに其の状況」／「神野新田開拓百年記念誌」

■ご協力をいただいた方々並びに機関（敬称略）

伊藤秋男、伊藤　悳、伊藤英利、大橋信夫、岡田順和、金子堅太郎、佐藤　晃、白井茂司、白井房一、三世恵規、(故)杉浦久雄

明照保育園、三郷保育園、豊橋若葉幼稚園、牟呂小学校、牟呂中学校、牟呂八幡宮、豊橋農協第五事業所、神野新田土地改良区、豊橋市役所広報広聴課・都市計画課、豊橋市美術博物館

■執筆委員

夏目　均、岡田正八、丹羽賢一、住吉政浩、三世善徳

平成16年度総代会、平成17年度総代会、平成18年度総代会

■執筆協力者

とよはし100祭サポーター　榊原義和

校区のあゆみ　牟呂

平成18年12月25日発行

編　集　牟呂校区総代会
牟呂校区史編集委員会

発　行　豊橋市総代会

印　刷　共和印刷株式会社

R100 古紙配合率100%の再生紙を使用しています。

PRINTED WITH SOY INK Trademark of American Soybean Association

2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City
つながり ひろがる 未来 豊橋